

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(51)

榎木原遺跡Ⅱ

一般地方道永吉高須線改良工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

1989年3月

鹿児島県教育委員会

例 言

- 1 本報告書は、一般地方道永吉高須線改良工事に伴う榎木原遺跡の発掘調査報告書である。
 - 2 発掘調査は、鹿児島県土木部道路建設課の受託事業として、鹿児島県教育委員会が実施した。
 - 3 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
 - 4 本書で用いた挿図中の通し番号は、図版中の番号と同一である。
 - 5 本書の執筆及び編集は、牛ノ濱・堂込が行った。
-

序 文

この報告書は、鹿児島県教育委員会が一般地方道永吉高須線改良工事に先だって、昭和63年度に実施した榎木原遺跡の発掘調査の記録です。

榎木原遺跡は、昭和60年度にもその一部について発掘調査が行われ、縄文時代早期、晩期及び弥生時代中期の遺構や遺物が数多く出土しました。

今回の発掘調査では、新たに古墳時代から平安・鎌倉・室町時代にわたる生活跡が発見されるなど、多大の成果を収めました。

本書は、地域の歴史の解明に貴重な手掛りを提供するものと考えており、地域の歴史の研究や文化財保護のために活用していただければ幸いです。

終わりに、この発掘調査に御協力くださった県土木部道路建設課、鹿屋市教育委員会並びに地元の方々に心から感謝いたします。

平成元年3月

鹿児島県教育委員会

教育長 濱 里 忠 宣

本文目次

序文

例言

第I章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過（日誌抄）	1
第II章 遺跡の位置及び環境	3
第III章 層序	9
第IV章 調査の概要	13
第1節 調査の概要	13
第2節 遺構	13
住居跡	13
土 壇	22
溝状遺構	23
古道跡	23
第3節 遺物	25
(1) 土器	25
縄文時代	25
弥生時代	36
古墳時代	36
中・近世	40
(2) 石器	48
第V章 まとめ	52

挿 図 目 次

第1図 榎木原遺跡の位置と周辺遺跡 …… 5	第19図 縄文土器(3) …… 28
第2図 遺跡周辺の地形図 …… 7	第20図 縄文土器(4) …… 29
第3図 グリッド配置図 …… 8	第21図 縄文土器(5) …… 30
第4図 土層柱状図 …… 9	第22図 縄文土器(6) …… 31
第5図 土層図 …… 10	第23図 縄文土器(7) …… 31
第6図 遺物出土状況 …… 11	第24図 縄文土器(8) …… 32
第7図 1号住居跡及び遺物出土状況 …… 14	第25図 縄文土器(9) …… 33
第8図 1号住居跡出土土器 …… 15	第26図 縄文土器(10) …… 33
第9図 1号住居跡出土石器 …… 16	第27図 弥生土器(1) …… 34
第10図 2・3号住居跡及び遺物出土状況 …… 17	第28図 弥生土器(2) …… 35
第11図 2号住居跡出土土器 …… 18	第29図 古墳時代の土器(1) …… 37
第12図 3号住居跡出土土器 …… 19	第30図 古墳時代の土器(2) …… 38
第13図 4号住居跡 …… 20	第31図 須恵器 …… 39
第14図 1号土坑 …… 21	第32図 中・近世の遺物 …… 40
第15図 溝状遺構 …… 24	第33図 石鏃・剥片 …… 48
第16図 古道跡 …… 25	第34図 打製石斧 …… 49
第17図 縄文土器(1) …… 26	第35図 敲石・磨石・石皿 …… 50
第18図 縄文土器(2) …… 27	

表 目 次

第1表 周辺遺跡地名表 …… 6	第6表 土器観察表(2) …… 45
第2表 縄文土器観察表(1) …… 41	第7表 土器観察表(3) …… 46
第3表 縄文土器観察表(2) …… 42	第8表 土器観察表(4) …… 47
第4表 縄文土器観察表(3) …… 43	第9表 石器計測表 …… 51
第5表 土器観察表(1) …… 44	

図 版 目 次

図版 1	榎木原遺跡遠景，伐採作業風景，草刈り作業風景，発掘作業風景 土層(1)，同(2)，3号住居跡発掘風景，	55
図版 2	1号住居跡遺物出土状況，同，溝状遺構，4号住居跡 鉄の出土したピット，縄文土器出土状況，弥生土器出土状況，遺物出土状況	56
図版 3	1号住居跡出土土器，同，同 2号住居跡出土土器，3号住居跡出土土器，4号住居跡出土土器，	57
図版 4	1号土壇出土土器，縄文土器，同，同 縄文土器，同，同，同，	58
図版 5	縄文土器，同，弥生土器，同 弥生土器，古墳時代の土器，同，同	59
図版 6	須恵器，同裏，中・近世の遺物，同裏 石鏃・剝片，打製石斧，敲石・磨石，石皿	60

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経過

榎木原遺跡は、昭和60年度に国道269号のバイパス建設工事に伴い、その一部については発掘調査が行われ、縄文時代早期から中・近世までの長い期間にわたる多数の遺構・遺物が発見された遺跡として知られていた。昭和63年度、鹿児島県土木部道路建設課において、一般地方道永吉高須線改良工事が計画されたため、計画地内に所在する同遺跡の取扱いについて県教育庁文化課と協議が重ねられた。その結果、県土木部からの受託事業として、県教育委員会が緊急発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなった。

第 2 節 調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教 育 長	濱里 忠宣
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	文化課課長	吉井 浩一
調査企画者	〃	課長補佐	奥園 義則
	〃	主 幹	立園多賀生
	〃	文化財研究員兼	
		埋蔵文化財係長	吉元 正幸
調査担当者	〃	主 査	牛ノ濱 修
	〃	文化財研究員	堂込 秀人
調査事務担当者	〃	企画助成係長	京田 秀允
		主 査	平山 章
		主 事	末永 郁代

なお、当遺跡の出土遺物については、鹿児島県文化財保護審議会委員 河口貞徳氏、鹿児島大学法文学部教授 上村俊雄氏、同助手 本田道輝氏の指導・助言を得た。また、発掘調査にあたっては、鹿屋市教育委員会及び地元の方々の協力を得た。

第 3 節 調査の経過

発掘調査は、昭和63年9月12日から同年10月19日まで行った。経過は日誌抄により以下記述する。

- 9月12日(月) 現地にてグリッド設定。肝属土木事務所・肝属教育事務所・鹿屋市教育委員会と打合せ。
- 9月13日(火) 榎木原遺跡発掘調査開始。発掘方法等諸注意及び説明。遺跡内の伐採・草刈り。
- 9月14日(水) 伐採・草刈り。
- 9月16日(金) グリッド設定後、D・E-3・4区掘り下げ。

9月19日(月) D・E-3・4区掘り下げ。平板実測。

9月20日(火) D・E-4・5・6区掘り下げ。D・E-3区,Ⅶ層以下掘り下げ。

9月21日(水) D・E-4・5・6区掘り下げ。D・E-3区,Ⅶ層以下掘り下げ。

9月22日(木) D・E-4・5・6区掘り下げ。D・E-3区,Ⅸ・Ⅹ層掘り下げ。平板実測。

9月26日(月) D・E-4・5・6区掘り下げ。D・E-7・8区,設定後掘り下げ。平板実測。D-3区,土層確認。

9月27日(火) D・E-3～8区掘り下げ。平板実測。

9月28日(水) D・E-4～8区掘り下げ。溝状遺構検出。平板実測。断面実測。

9月29日(木) D・E-4～8区掘り下げ。溝状遺構検出。平板実測。D・E-6区,東隅で開聞岳噴出物(紫ゴラ)検出。

9月30日(金) D・E-5～8区掘り下げ。F-21・22区,設定後掘り下げ。

10月3日(月) E-4区,掘り下げ。F-20・21区設定後,掘り下げ。1号住居跡,遺構検出。平板実測

10月4日(火) 雨の為作業中止。室内作業(出土遺物の点検及び図面整理)。

10月5日(水) F-19～22区,掘り下げ。2号住居跡,遺構検出。平板実測。

10月6日(木) F-14・15区,設定後掘り下げ。F-19～22区,溝状遺構検出。2号住居跡遺構検出。平板実測。

10月7日(金) D・E-5・6区, F-14・15区,掘り下げ。F-19～22区,溝状遺構検出。

10月11日(火) F-14・15区, F-19～22区掘り下げ。平板実測。断面実測。

10月12日(水) D・E-5・6区, F-14・15区,掘り下げ。F-19～22区,溝状遺構検出。平板実測。

10月13日(木) F-14・15区, F-19～22区掘り下げ。1・2号住居跡遺構検出。3・4号住居跡遺構確認。平板実測。

10月14日(金) F-14・15区, F-19～22区掘り下げ。1・2号住居跡実測。3・4号住居跡遺構検出。平板実測。断面実測。

10月17日(月) F-19～22区掘り下げ。3・4号住居跡遺構検出。5号住居跡遺構確認。平板実測。断面実測。B-15区,設定後掘り下げ。

10月18日(火) F-19～22区掘り下げ。B-15区掘り下げ。3・4・5号住居跡実測。平板実測。断面実測。一部発掘用具収蔵庫へ。

10月19日(水) F-21・22区掘り下げ。Ⅸ層上部で縄文前期の土器2点出土。平板実測。今年度は,防災上残した土手部分を除いて終了する。

10月17日～ 重富収蔵庫において,整理作業整理作業の報告書作成。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

榎木原遺跡は鹿屋市高須町榎木原に所在する遺跡である。

鹿屋市は、大隅半島のほぼ中央にあり、大隅半島の経済・政治の中心になっている。この鹿屋市は、東は串良町・高山町、西は錦江湾、南は大根占町、北は垂水市に接している。市の北部は高隅山系、南部は国見山系が連なり、西部は錦江湾に接し、市の大半は山と海にかこまれたシラス台地である。シラス台地は南九州では一般的にみられる地形で、約22,000年前の始良カルデラ火山の噴出物からできている。このシラス台地は平坦な地形で畑作地帯となり、肝属郡から曾於郡・都城市まで続いている。

榎木原遺跡が立地する高須町一帯は、鹿屋市の西南部に位置し、輝石安山岩を母岩とする標高約170mの霧島ヶ丘を中心とする小さな山塊と、それをとりまく小規模な台地からなっている。山体の北側は傾斜が急であるが、西側から南側にかけてはゆるやかな裾野となっている。遺跡は、この裾野、標高約47mの台地上に立地している。遺跡の東側には、小さな谷があり、谷頭には湧水地点があって立神と称する水神が祭られている。

遺跡の南には浜田、西には高須、北東には野里の集落がある。また、榎木原遺跡の北側には野里方面より流れてきた高須川が蛇行し、錦江湾にそそいでいる。

第2節 史的環境

鹿屋地方には、縄文・弥生・古墳時代の遺跡が多数発見されていて、発掘調査が実施されているものも少なくない。そこで周辺地域とあわせて主な遺跡を時代順に若干紹介したい。

旧石器時代

鹿屋地方では旧石器時代の遺跡・遺物は未報告であるが、最近、国道220号バイパス建設工事に伴う榎崎A遺跡^(註1)の発掘調査で細石器を中心とした旧石器時代の遺物が出土し、また、南町伊敷遺跡^(註2)からは、「薩摩火山灰」の下部より隆帯文土器が、榎崎B遺跡^(註3)からは「薩摩火山灰」の下部より黒曜石製の剥片が出土している。

縄文時代

縄文時代の遺跡としては、上楠原遺跡^(註4)、岩ノ上遺跡^(註5)(7)、中ノ原遺跡、榎田下遺跡、前畑遺跡^(註6)、谷平遺跡^(註7)(12)、早馬遺跡^(註8)、宮ノ脇遺跡^(註9)、打馬平原遺跡^(註10)、水の谷遺跡^(註10)があげられる。上楠原遺跡は早・前期の遺跡で、昭和59年に調査され、前平式・塞ノ神式土器と集石が検出された。岩ノ上遺跡は昭和61年調査され、早期の吉田式・貝殻文土器が出土している。中ノ原遺跡・榎田下遺跡・前畑遺跡は国道220号バイパス建設工事に伴って調査が行われた遺跡である。中ノ原遺跡では前期の集石、晩期の住居跡・土壇・集石が検出され、榎田下遺跡では、早期の前平式・前期の条痕文・後期の指宿式・市来式土器及び多くの石鏃が確認されている。谷平遺跡は霧島ヶ丘遺跡群内の遺跡で、昭和59年から調査され、早・晩期の遺物が出土している。早馬

遺跡・宮ノ脇遺跡は、昭和60年調査され、早馬遺跡では、早・晩期の遺物が、宮ノ脇遺跡では、後期・晩期の遺物が出土している。打馬平原遺跡は、昭和62年調査された遺跡で早期を主体とした遺跡である。土塚3基・集石27基の遺構と石坂式・吉田式・前平式・押型文・塞ノ神式土器や石皿・磨石・石錘・石鏃・石斧等の石器が出土し、特殊な石器としてトロトロ石器・環状石斧が出土し注目された。水の谷遺跡は、後・晩期の遺跡であり、特に晩期の遺物は豊富で、多くの石器と多種の土器及び住居跡・土塚が検出された。このように、鹿屋地方には、本県の縄文時代を研究する上で必要な数々の遺跡が所在する。

弥生時代

弥生時代の遺跡として、王子遺跡^(註11)、高付遺跡^(註12)、中ノ丸遺跡^(註13)、中ノ原遺跡、前畑遺跡が知られている。王子遺跡は、昭和56年から59年にかけて調査され、中期末の集落が確認された遺跡である。竪穴式住居跡27基、堀立柱建物跡14棟、土塚4基が検出され、北九州や瀬戸内系の特徴をもつ土器や多くの石器が出土し、注目をされた。高付遺跡は、昭和57～58年に調査された弥生時代から古墳時代の遺跡である。瀬戸内や東九州の関連を示す土器や石包丁、石鎌など農耕に関係する遺物が出土した。中ノ丸遺跡、中ノ原遺跡、前畑遺跡は国道220号バイパス建設工事に伴う発掘調査で、住居跡等が検出されている。

古墳時代

本県の古墳時代の遺跡としては、円墳、前方後円墳等の高塚古墳と隼人族の墓制といわれる地下式横穴、地下式板石積石室があげられる。高塚古墳は大隅地方と長島地方に多くみられ、地下式横穴は宮崎県から大隅地方・北始良・伊佐地方を中心に、地下式板石積石室は川内川流域から熊本県南部あたりまで分布する。鹿屋地方では、短甲と衝角付冑が出土した祓川地下式横穴^(註14)と円墳3基が検出された野里の古墳が知られている。生活跡としては、上原遺跡^(註15)、俣刈遺跡^(註16)、立神遺跡^(註17)が知られている。上原遺跡は昭和55年調査され、住居跡・成川式土器・須恵器・紡錘車・鉄器等が検出されている。俣刈遺跡、立神遺跡は、榎木原遺跡の隣接地に所在し、縄文時代から古墳時代までの遺物が出土している。

- 註1 国道220号バイパス工事に伴う調査で昭和63年4月から発掘調査実施中
 2 鹿児島県教育委員会「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(25) 1983
 3 国道220号バイパス工事に伴う調査で昭和62年確認調査の際出土
 4 鹿屋市教育委員会「下祓川遺跡群(上楠原遺跡)」鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 1984
 5 鹿屋市教育委員会「岩之上遺跡」鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 1987
 6 鹿児島県教育委員会「中ノ原遺跡・榎田下遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(48) 1989
 前畑遺跡は昭和62～63年に調査され、現在報告書作成中である。
 7 霧島ヶ丘公園計画に基づき、鹿屋市教育委員会にて昭和59年発掘調査
 8 鹿屋市教育委員会「早馬遺跡・宮の前遺跡」鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 1986
 9 鹿屋市教育委員会「打馬平原遺跡」鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(8) 1988
 10 鹿屋市教育委員会「水の谷遺跡」鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 1986
 11 鹿児島県教育委員会「王子遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(34) 1985
 12 鹿屋市教育委員会「高付遺跡」鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 1984
 13 鹿児島県教育委員会「中ノ丸遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(48) 1989
 14 寺師見国「鹿児島県の地下式土壙」鹿児島県文化財調査報告書4 1957
 15 註2に同じ
 16 鹿屋市教育委員会「俣刈遺跡」鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 1985
 17 鹿屋市教育委員会「立神遺跡」鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(9) 1988



第1図 榎木原遺跡の位置と周辺遺跡

第1表 周辺遺跡地名表

No.	遺跡名	所在地	時代	備考	文献
1	小野原	小野原町	古・歴	土器片採集	
2	丸岡	小野原町	古・歴	成川式土器・鉄滓採集	
3	天神	天神町	古墳	成川式土器片採集	
4	大津	野里町	弥・古	土器片採集	
5	野里小西	野里町	縄・古	土器片採集	
6	野里の古墳	野里町1826	古墳	円墳3基	
7	岩之上	高須町岩之上	縄文	石坂・吉田式	①
8	榎木原	高須町榎木原	縄文～歴史	住居跡, 早期～晩期土器他	②
9	立神	高須町立神	縄・古・歴	土壇, 市来式・晩期土器他	③
10	キタバイ	高須町キタバイ	弥・古	土器, 石器	
11	霧島ヶ丘	霧島ヶ丘公園	縄文	吉田・塞ノ神式 S59調査	
12	谷平	横山町	古墳	住居跡, 土器 S59調査	
13	松の岡	横山町松の岡	古・歴	S24調査, 住居跡	
14	横山1	横山町	古墳	土器片採集	
15	横山2	横山町	古墳	土器片採集	
16	横山3	横山町	古墳	土器片採集	
17	岡元	横山町岡元	弥・古	石斧, 土器片採集	
18	下西原	浜田町下西原	弥・古・歴	成川式, 青磁	
19	浜田小南	浜田町浜田小学校	弥・古	壺形土器	
20	宮の尾	浜田町宮地	弥・古	土器片・石器採集	
21	浜田	浜田町	古墳	土器片採集	
22	瀬筒原	大始良町瀬筒原	弥・古・歴	成川式土器	
23	小永崎	大始良町小永崎	縄文～歴史	成川式, 土師器, 白磁	
24	藤崎原	大始良町藤崎原	縄・古	石斧, 土器片採集	
25	茶園ノ上	大始良町茶園ノ上	縄・古	黒色研磨土器, 成川式	
26	永崎原	大始良町永崎原	縄文～歴史	成川式, 青磁	
27	諏訪尾	大始良町諏訪尾	縄・古	成川式土器	
28	山神	大始良町山神	縄文	土器片採集	
29	本村原	大始良町本村原	弥・古	土器片採集	
30	小浜	浜田町小浜	古墳	小型壺形土器	
31	平原	浜田町	古墳	笹貫式	

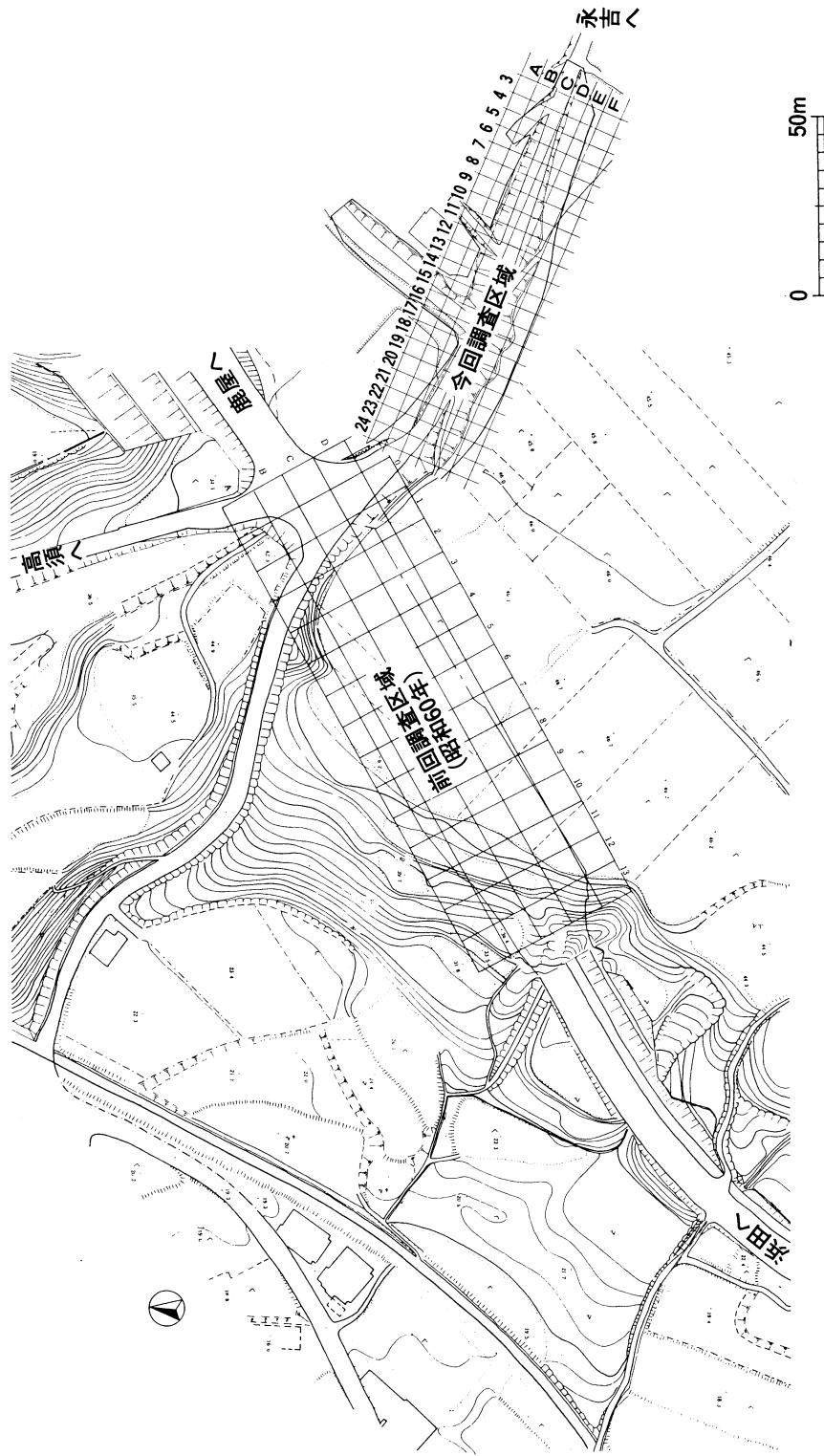
文献

- ① 鹿屋市教育委員会「岩之上遺跡」鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 1987
- ② 鹿児島県教育委員会「榎木原遺跡Ⅱ」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(44) 1987
- ③ 鹿屋市教育委員会「立神遺跡」鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(9) 1988

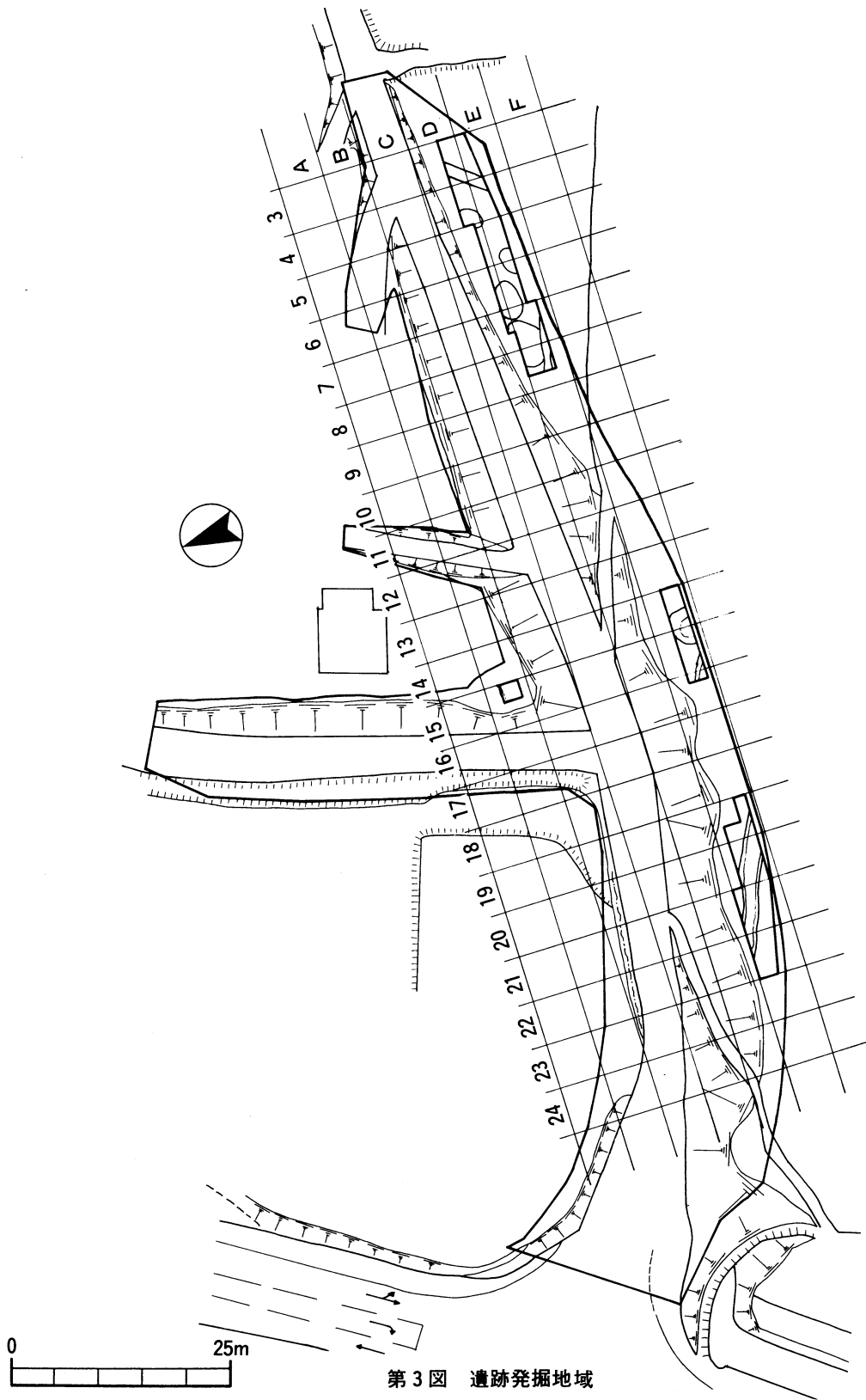
その他の遺跡については、下位の文献を参考にして作成した。

鹿児島県教育委員会「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(25) 1983

鹿児島県教育委員会「鹿児島県市町村別遺跡地名表」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(36) 1985



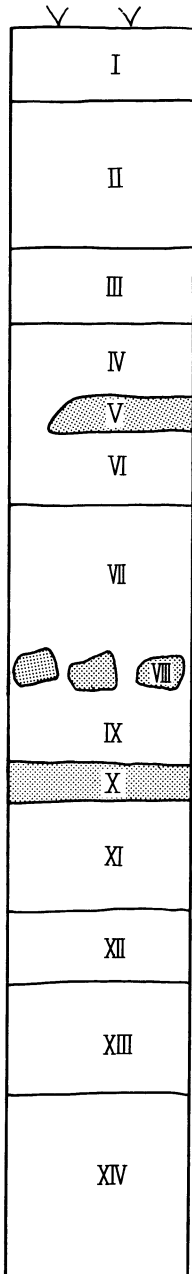
第2図 榎木原遺跡の地形図



第3図 遺跡発掘地域

第三章 層 序

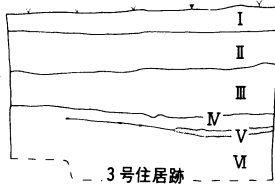
遺跡内の地層は場所によって層序に若干の相違はあるが、基本的にはI層耕作土からXIV層シラスまで第4図のように14層に区分できる。前回の調査地域と比較すると今回の層位は深く、各層の厚みもあった。遺物の出土は、VI層に集中した。



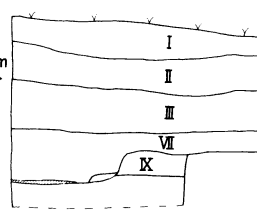
第4図 土層柱状図

- I層 褐色の耕作土。色調によって2～3層に区分できる。
- II層 暗灰褐色土。2～3mm位の白色軽石を含む。東側で厚く西側に行くに従い薄くなる。
- III層 黒褐色土。粘質がなくサラサラしている。II層同様、東側で厚く西側に行くに従い薄くなる。
- IV層 暗褐色土。全体にやわらかく粘質もなくサラサラしている。
- V層 暗青紫色火山灰土。D・E-6区の3号住居跡の埋土上部にブロック状に薄く平行に堆積している。開聞岳火山起源の火山噴出物と考えられ、平安時代に比定されている。
- VI層 明茶褐色土。V層の確認される地点ではIV層との区別が出来るが、全体として区別が難しい。
- VII層 暗茶褐色土。やや粘質を帯びる。
- VIII層 黄白色軽石。池田火山起源の池田降下軽石。卵大の軽石で、上下20cm程度の幅で暗茶褐色土中に点在している。
- IX層 黄褐色土。X層の火山灰に有機質が混在したもので、粘質が弱く、径2mm前後の軽石を含む。
- X層 明黄色土。鬼界カルデラ火山噴出物。噴出物の性質により降下火山灰・火砕流堆積物・降下軽石に分けられる。
- XI層 暗黄褐色土。明るい肌色を呈する硬質の火山灰で、比較的細粒である。
- XII層 黒褐色土。濃い黒色で粘性が高く、径5mm前後の軽石混じりで乾くとクラックが発達する。下部には約11,000年前の桜島起源の軽石層（薩摩火山灰）が部分的にみられる。
- XIII層 暗茶褐色粘質土。極めて微粒で粘性が高く、乾くとクラックが発達する。
- XIV層 シラス（AT火山灰）

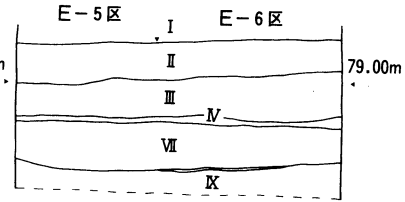
(西側断面) E-6区 D-6区



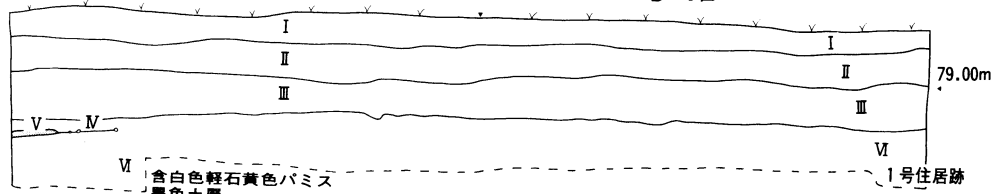
(東側断面) D-5区



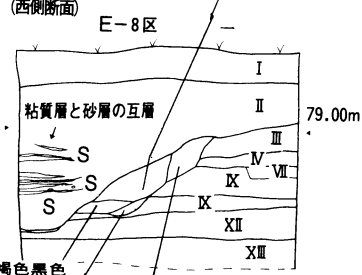
(南側断面)



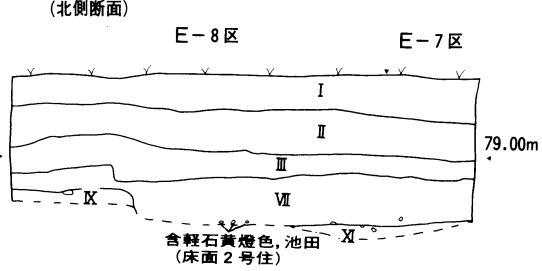
(北側断面) D-6区



(西側断面)



(北側断面)



強粘質土 (固くしまった)
 黒黄褐色黒色
 含白色軽石黄色パミス黒色土層

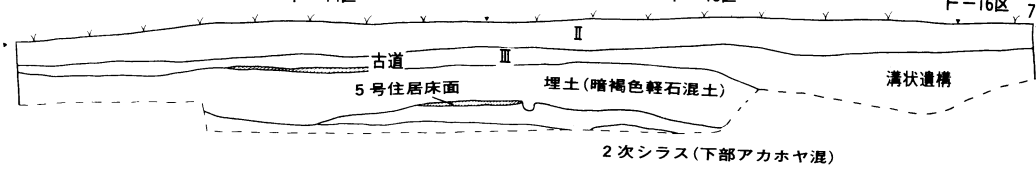
(南側断面)

F-14区

F-15区

F-16区

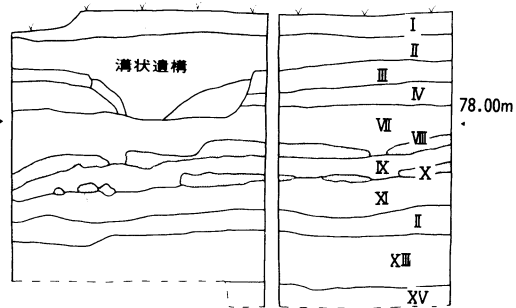
79.00m



(西側断面)

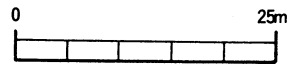
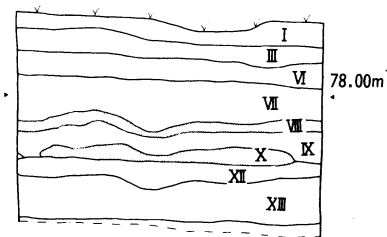
F-20E

(北側断面)

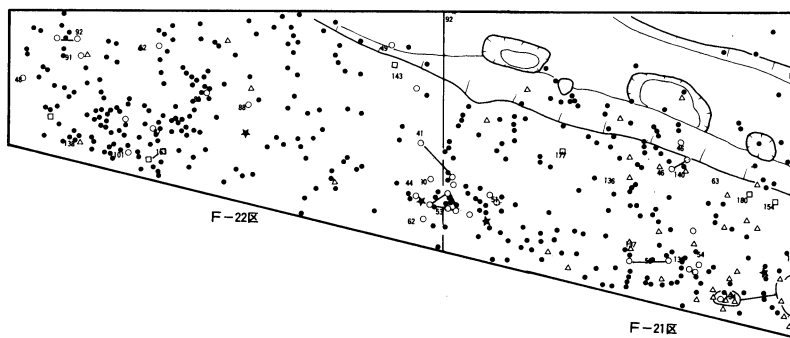
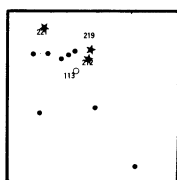
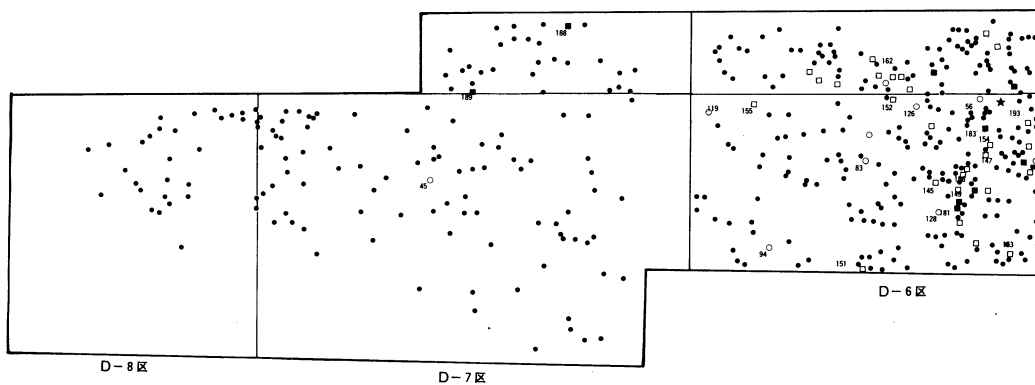


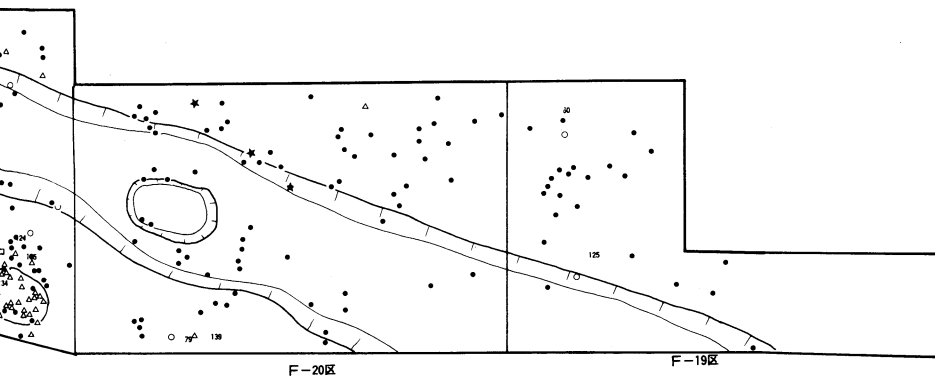
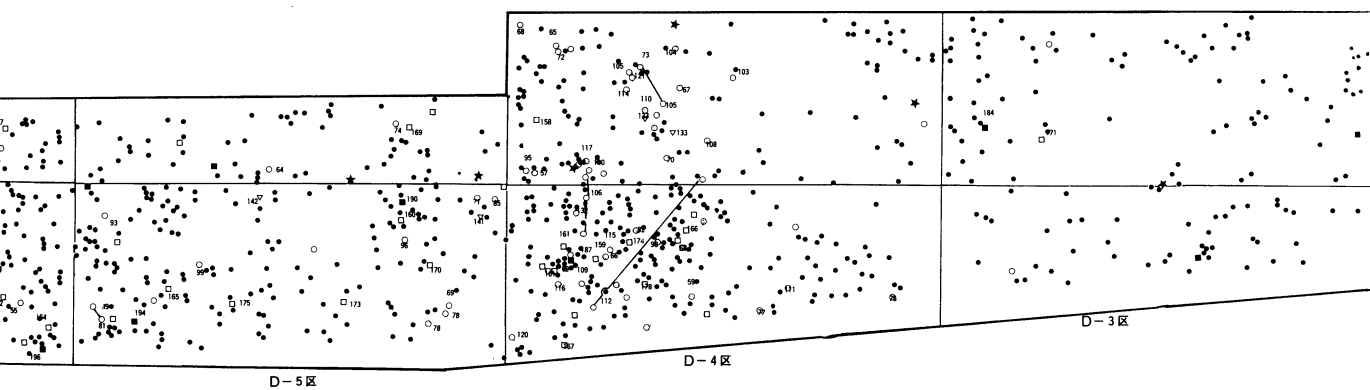
(北側断面)

F-22区

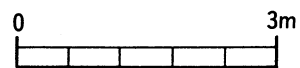


第5図 土層図





- 縄文
- △ 弥生
- 古墳
- 須恵器
- ★ 石器



6 遺物出土状況

第Ⅳ章 調査の概要

第1節 調査の概要

今回の調査は、前回（昭60）の調査（国道269号バイパス工事に伴う調査）を参考にしながら行った。調査を行うにあたっては、まず、草刈り・伐採から始め、改良道路のT-1とB、Pを結ぶ線を中心として5m枠のグリッドを設定し、東側より1～23、北側よりA～Fと名称した。

台地は、ガケ面で崩落している部分があり、現道との比高差が大きく、調査中の安全、調査後の防災を考慮してガケ側に土手を残し、崩落部分では調査を行わなかった。調査はD・E-3～D・E-8区、F-14～F-16区、F-19～F-22区までの区域とA-15区の4区域で行った。

遺物は、Ⅳ層・Ⅵ層からの出土が顕著で、精査を行いながら掘り下げ、Ⅷ層上面を最終の遺構検出面とみなした。Ⅴ層の紫ゴラが検出されたのは、D・E-6・7区の3号住居跡直上あたりのみで、その他では、検出されなかった。Ⅳ層・Ⅵ層は、縄文時代晩期から平安時代・中世に至る遺物が混在する状況であった。Ⅶ層は、縄文時代前期から弥生時代までの間の遺物を包含するが、縄文時代晩期の遺物が中心であった。

遺構は、古道跡（二時期一上・下）2本、住居跡4基（1～4）、土壇1基、溝状遺構3条が検出された。住居跡は、Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ層の色調が類似している為、掘り込みが明確な状態で検出されたものは少なかった。そこで、まず住居跡の床面を検出し、その後に壁面を確認するという作業を行ったが、プランを明確に把握することはできなかった。

Ⅷ層以下については、随時、シラス層上面まで確認トレンチを設定して掘り下げたが、遺構・遺物は確認されなかった。

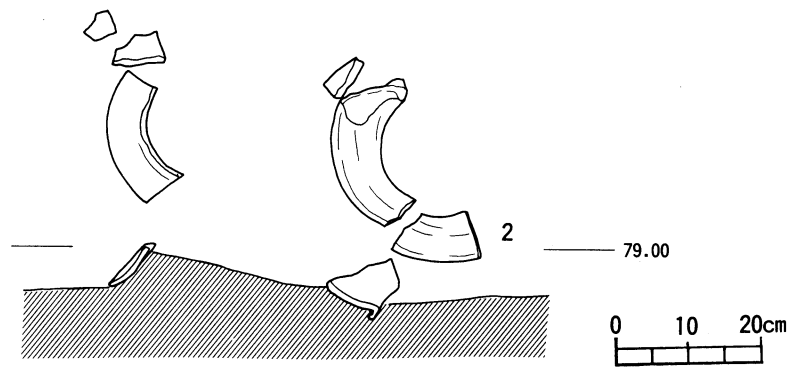
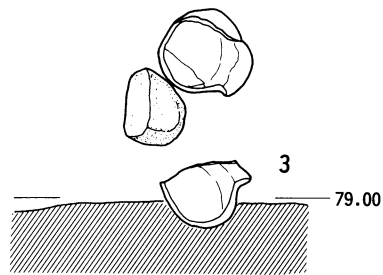
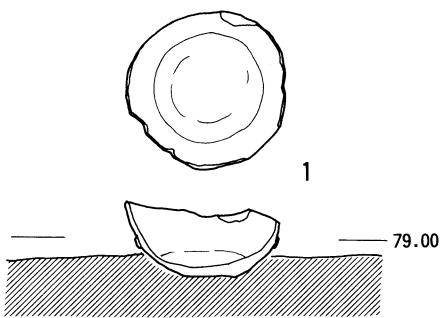
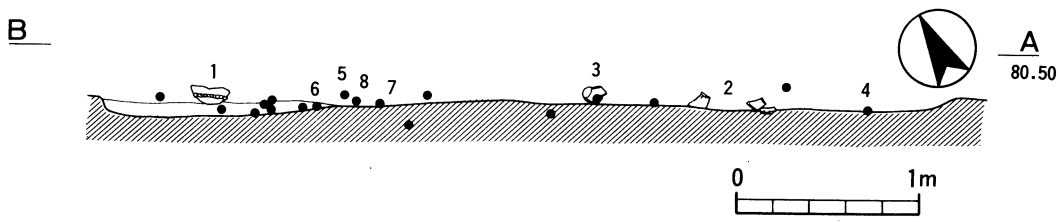
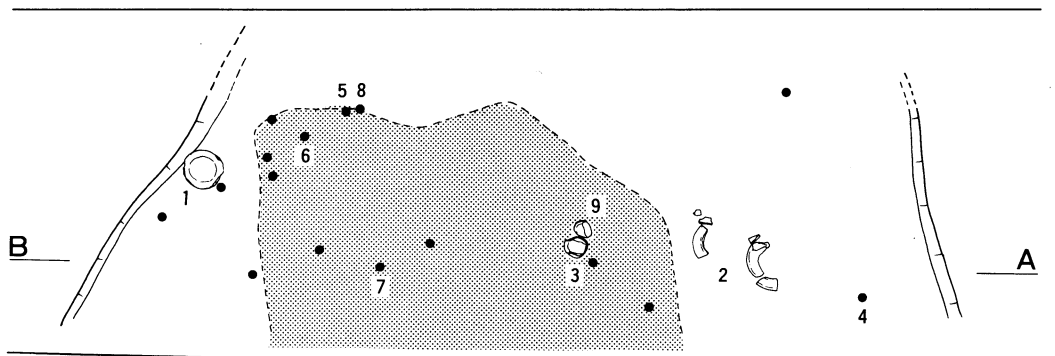
第2節 遺構

(1) 1号住居跡

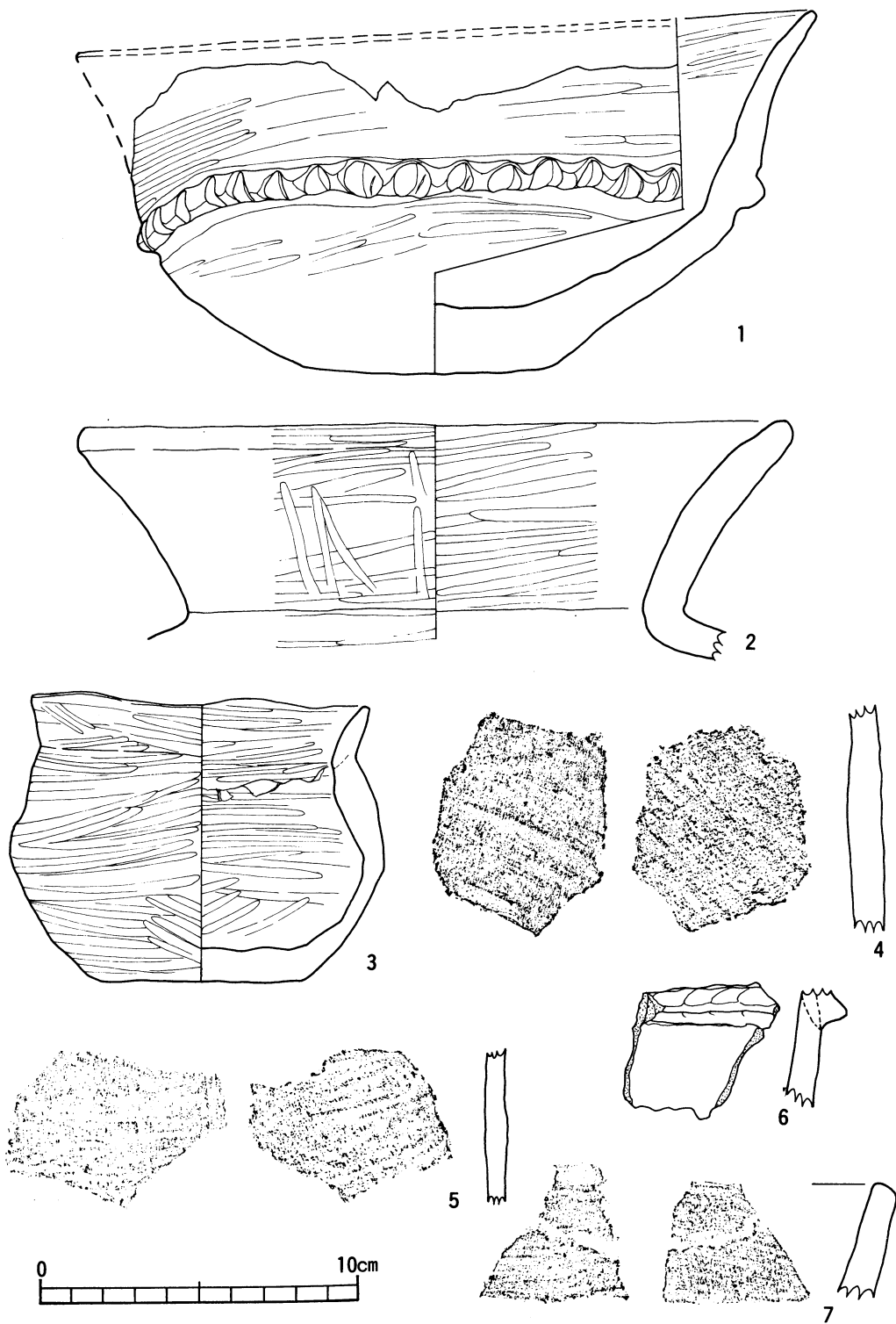
F-14、F-15区にかけて、Ⅳ層の掘り下げ中に、浅鉢と小型壺の完形土器が出土した。そこで住居跡を考慮しながら慎重に検出したが、床面がおさえられたのみで、柱穴・壁面は検出できなかった。床面は、東西230cm×南北140cmの範囲になる。床面をおっていくなかで床面の東西にやや色調の違いを認めた。その幅は450cm～500cmであるが、プランは不明であった。

出土遺物（1～9）

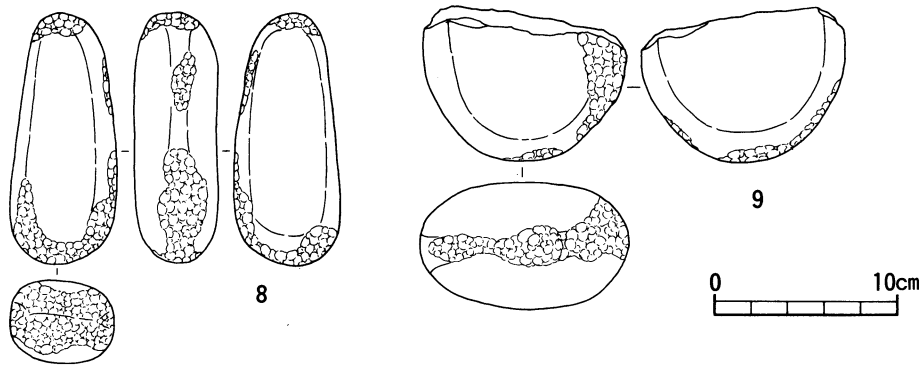
床面に、底部が埋まったかたちで1と3の完形土器が出土した。1は浅鉢で、底部は丸底気味の平底で、胴部に貼り付け突帯を有し、口縁部は外反気味に立ち上がる。突帯には刻目がいれられ、爪痕跡が残っているところから指頭により施されたものと考えられる。器壁は厚く、器面は荒れて一部剥落しているが、内外にヘラミガキの痕跡がうかがえる。外面突帯下から底部にかけて器面の4割くらい黒斑を有する。3は小型壺で、不安定な平底に、頸部がしまり口縁部が外反する。頸部直下に、粘土の継ぎ目が残る、成形がやや雑で、器面に凹凸があり、内外



第7図 1号住居跡及び遺物出土状況



第8图 1号住居跡出土土器



第9図 1号住居跡出土の石器

ともヘラミガキされている黒色研磨土器である。2は壺の口縁部から頸部にかけての破片で、胴部以下は欠損している。器壁が厚く口縁端は丸く、ゆるやかに外反する。頸部の曲がりぐあいから肩の張る胴部をもつ器形が推測される。4は暗赤褐色を呈し、内外にヘラケズリ痕をもつ土器片で、縄文時代晩期のものと考えられる。5は、内外に貝殻条痕がある。6は、成川様式の甕の頸部突帯で上下から指頭でつまみを加えて成形している。7は、縄文時代晩期の深鉢の口縁部にあたるものである。

石器は磨石が2点出土した。8は長楕円、9は円盤状礫の安山岩を石材とし、敲き、押し潰し、磨るといった機能を備えた石器である。8は長さ13.7cm、幅4.4cm、重量540gをはかり、9は側縁部に敲打痕があるもので、長さ8.2cm、幅11.1cm、重量854gをはかる。

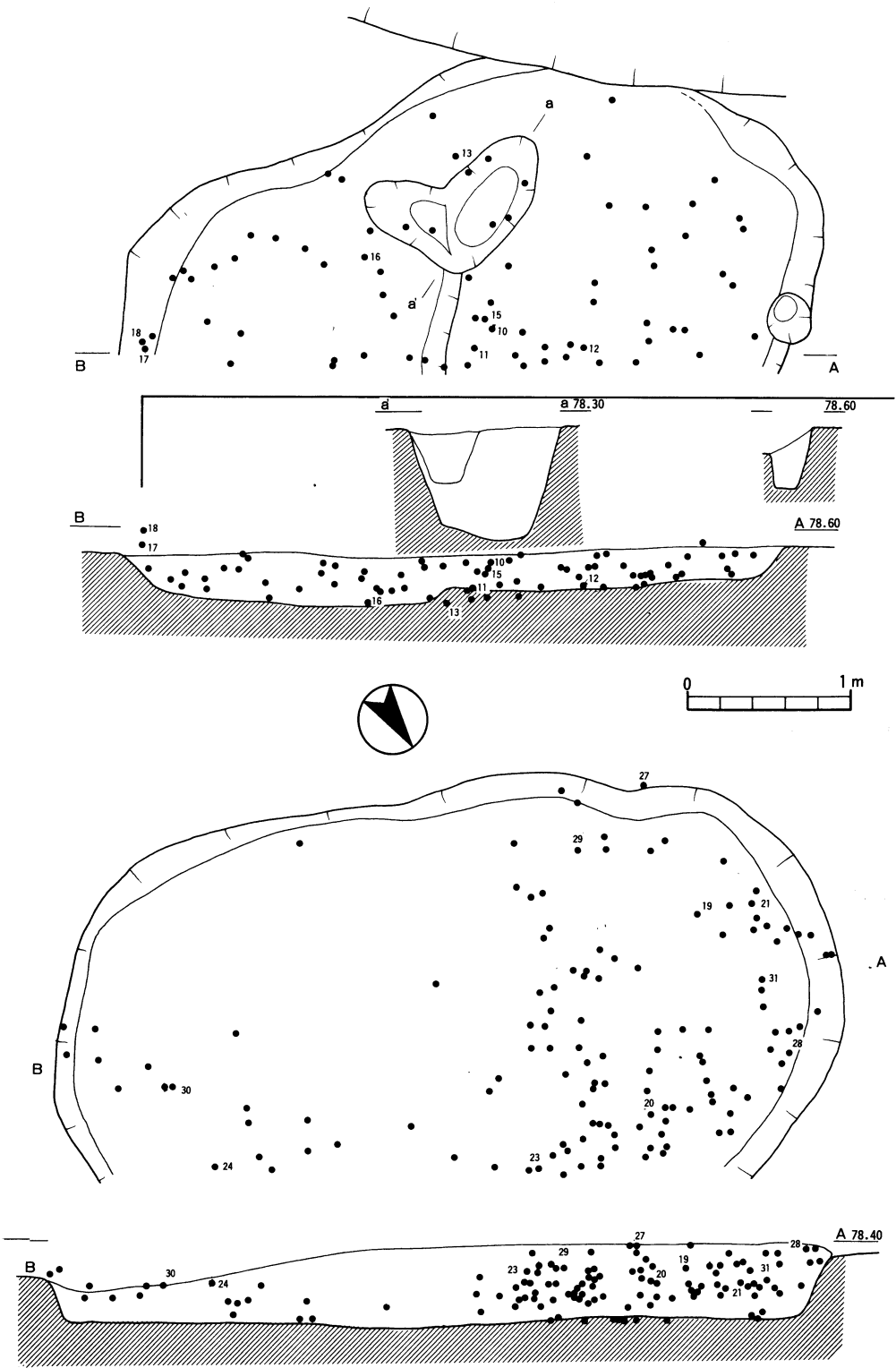
住居跡の南側の土層を観察しても、掘り込み面、壁面は確認できず、遺物も縄文時代晩期～古墳時代までの遺物が混在している状況であり、床面の直ぐ上までは攪乱されていると考えられる。住居跡の時期は、1と3の完形土器が床面と判断できる固い面に底部が埋まって出土した状況から、縄文時代晩期の住居跡と判断される。2の壺は、レベル的には1・3と同一レベルから出土しているが、土器の器形・調整・色調など弥生時代後期をさかのぼらない時期の壺であり、形式的にも異なる。2の頸部以下同一個体の他の部分の破片は、あたりにはまったくみあたらず流れ込みの可能性が高い。

(2) 2号住居跡

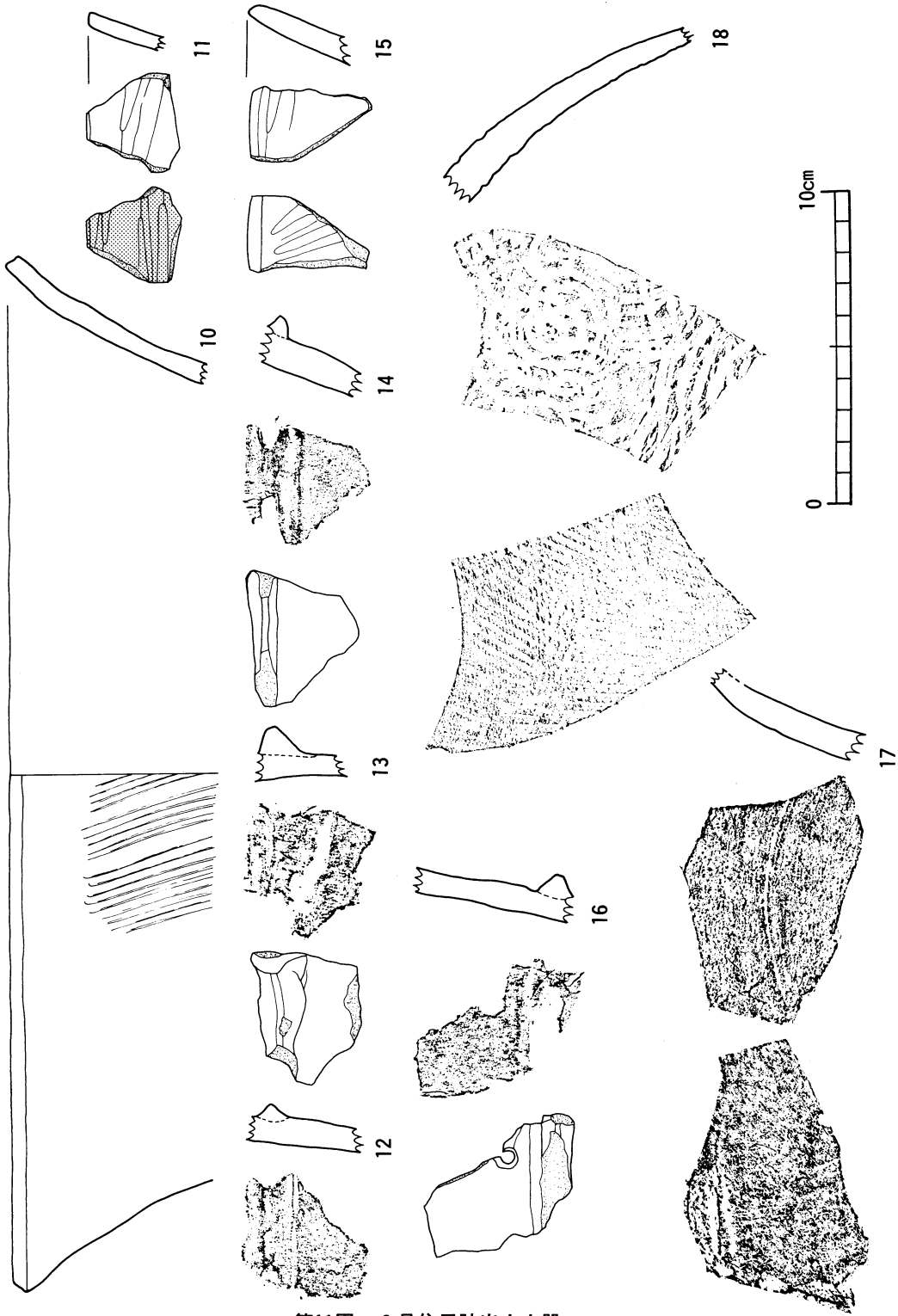
E-8区の西側・Ⅶ層中で色調の変化をとらえたが、プランが明確でなく、最終的にはⅧ層上面で把握した。南側は溝状遺構1によって切られている。また全体のプランは半分しか検出できず、円形か隅丸方形か判断できなかった。最大幅で400cmをはかる。床面は西側では把握できたが、東側でははっきりしなかった。中央部南側よりP1が、東側壁面にP2が検出された。P2は埋土が新しく住居跡に伴わないものであると考えられる。P1については、住居跡に伴うものであるが全体のプランが明らかにされないと柱穴かどうか判断できない。

出土遺物 (10～18)

埋土に多くの土器の小破片を包含していた。10は壺の口縁部で、化粧土で器面を覆い赤色を



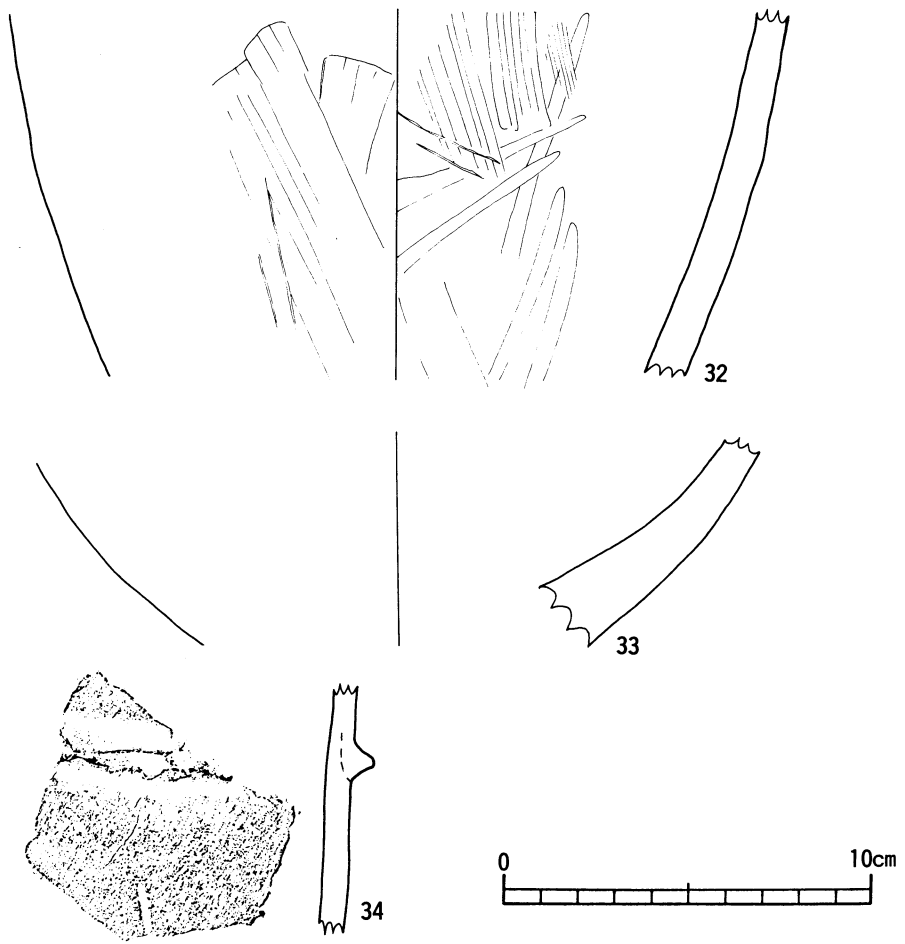
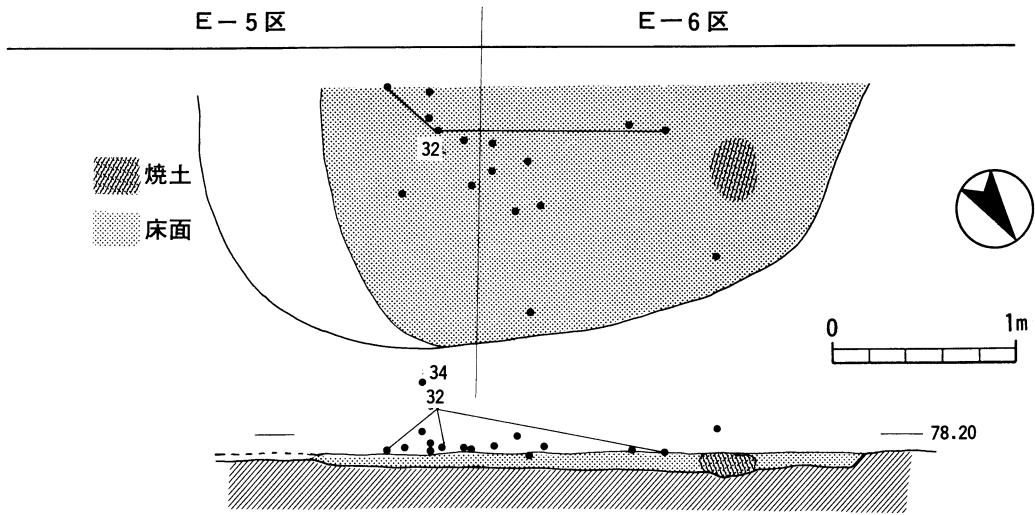
第10図 2・3号住居跡及び遺物出土状況



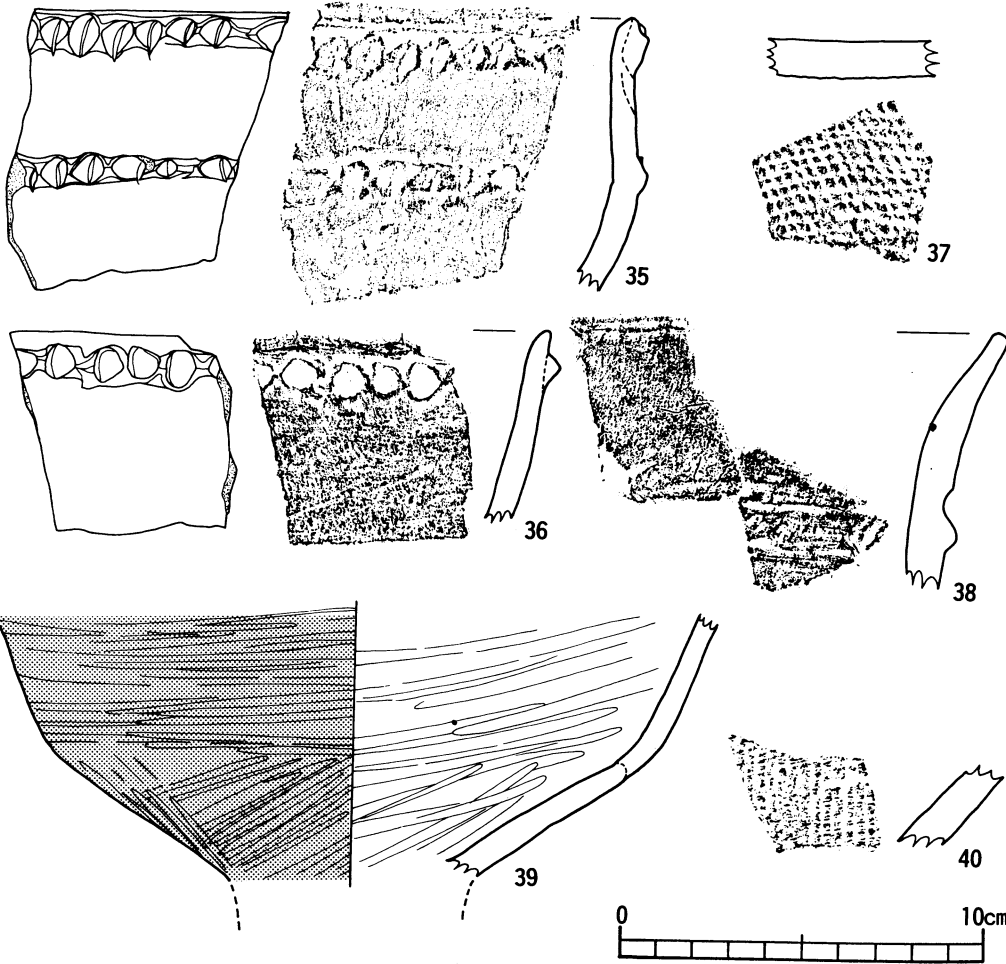
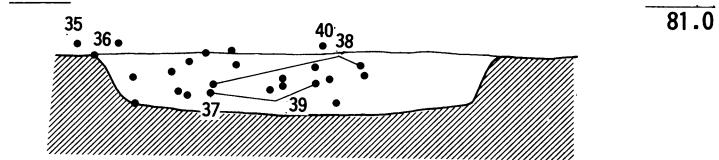
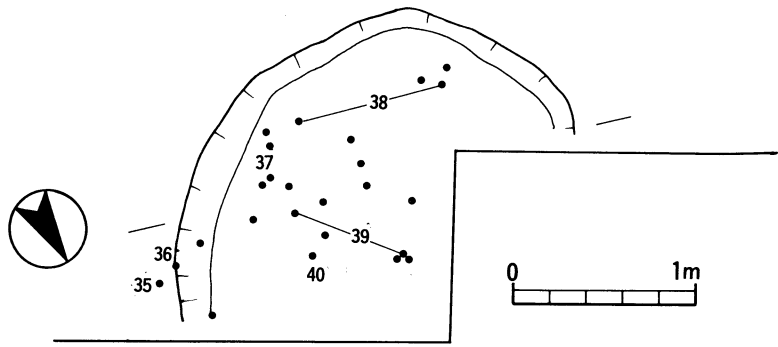
第11图 2号住居跡出土土器



第12图 3号住居跡出土土器



第13图 4号住居跡



第14图 1号土坛

呈している。外面は粗いハケ目で縦方向に調整されている。11は高坏の坏部あるいは小壺の口縁部で、外側に丹を塗って、内外をヘラにより研磨している。15を除いて12～16は、甕の頸部突帯であろう。15は小型鉢の口縁部でヘラミガキ痕を残す。16は穿孔が施されている。穿孔は焼成後、外から内へ向かって行われている。12～16の胎土、色調、焼成はいずれも共通している成川式の甕である。17・18は須恵器である。17は、頸部から口縁部に立ち上がる部分で、内面は、回転ナデ、外面は縦方向にナデている。18は、頸部から肩にかけての破片である。

遺物はほとんどが同時期の遺物であり、層位的にも、古墳時代終末頃の住居跡と考えられる。

(3) 3号住居跡

Ⅳ層とⅥ層は掘り下げ中には区別が付きがたかったが、D-6区に、開聞岳の噴出物（紫ゴラ）がレンズ状に堆積しているのが認められ、Ⅳ層とⅥ層を以後区別していく契機になるとともに、堆積状況から下層に凹地の存在を暗示するものであった。D-6、7区、Ⅷ層上面で検出された。東西を長軸（480cm）とする楕円形のプランであるが、柱穴は検出できなかった。

出土遺物（19～31）

19は、縄文時代晩期の甕の口縁部で条痕をナデ消している。20・21・22・27は成川式の甕の突帯である。23～26は、壺の胴部突帯でいわゆる蒲鉾型突帯で、すべてヘラによって沈線を施している。23・24・26は斜格子文、25は斜沈線である。28は高坏の脚部、29は弥生時代後期の壺の突帯とおもわれる。30・31は須恵器である。30は、須恵器の坏で高台がつき7世紀後半をさかのぼらない時期のもので、まだ新しくなる可能性も残されている。19・29・30・31、を除き古墳時代終末に位置付けられる。他の土器片も小破片で図化できなかったが古墳時代のもので、出土状況から同時期の住居跡と考えられる。

(4) 4号住居跡

E-5、6区において、Ⅷ層上面を精査作業中に、最大幅300cm×140cmの半円状に、床面を検出した。Ⅷ層に若干掘り込まれ、焼土が床土の中に埋まっていた。南側の土層断面を観察したが、掘り込み面、壁面は認められなかった。プランは不明、柱穴は確認できなかった。

出土遺物（32～34）

成川式の甕の胴部（32・33）と、突帯部分（34）が床面直上から出土している。

住居跡の時期は、古墳時代の可能性が高いが、この床面の上は攪乱されていて、明確な時期を設定できない。

(5) 1号土壇

D-4、5区でⅧ層で検出した。しっかりした壁面をもって、径約2mの円形プランと思われる。当初住居跡として掘り下げていたが、床面らしき固くしまった面がなく、また住居跡としては小さいところから、土壇と判断した。北側を発掘し全体のプランをみて再度検討する必要がある。

出土遺物（35～40）

35・36は、縄文晩期の深鉢で、35は両面をヨコナデ、36は内面がヘラミガキで調整されてい

る。37・40は、繊維圧痕文土器である。38は、成川式の甕の口縁部から頸部にかけての破片である。39は、高坏の坏部と思われる。内外を丁寧にヘラミガキして、外面には丹が塗られている。

縄文時代晩期の土器片から須恵器まで、埋土に混在していて、時期は確定できない。

(6) 溝状遺構

① 溝状遺構 1

E-7, 8区, 東西方向に溝状遺構を検出した。深さ約1mで、土層は、砂層と鉄分の沈澱したと思われる層が互にレンズ状に堆積していた。遺物は少なく、鉄さいが5点(5.4cm×4.8cm×3.4cm-100g・8.4cm×5.0cm×2.9cm-122g・5.3cm×4.4cm×2.8cm-87g・3.6cm×2.0cm×1.9cm-18g・3.0cm×2.4cm×1.8cm×19g)と、錆びて形状は分からないが鉄製品が1点出土している。層位的にも近世の時期のものである。この遺構に伴うピットからは、鉄さい2点が出土している。南側は路線外のために遺構の性格ははっきりしないが、近くに砂鉄を産する砂浜もあり、近世の製鉄遺構の可能性がある。

② 溝状遺構 2

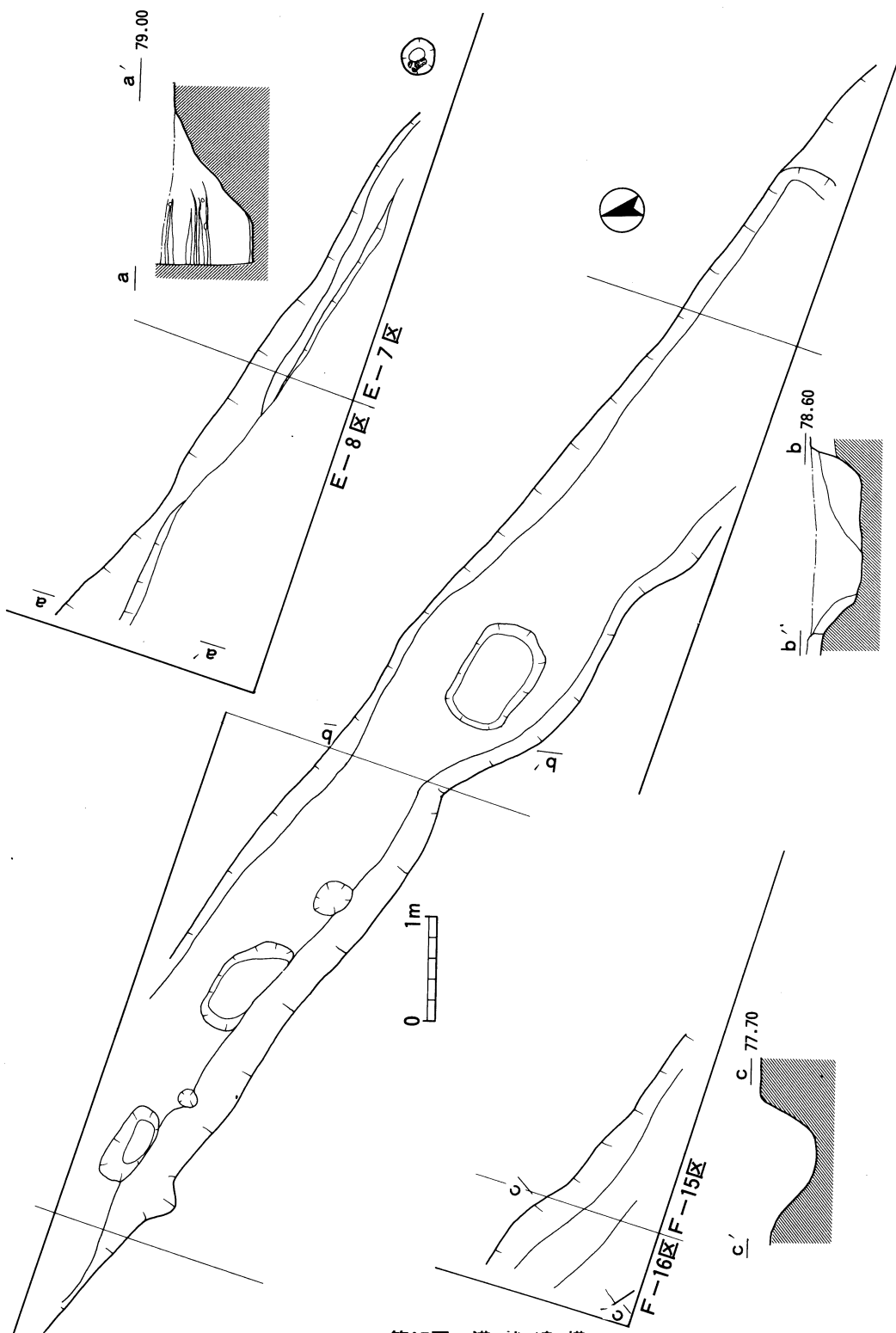
F-18区からF-22区にかけて東西方向へ伸びる。IV層上面で検出したが、土層断面からIII層上面から掘り込まれていることが確認できた。埋土に縄文時代晩期から古墳時代の遺物を包含していたが、小破片が多かった。掘り込み面からみて中・近世の遺構と考えられる。

③ 溝状遺構 3

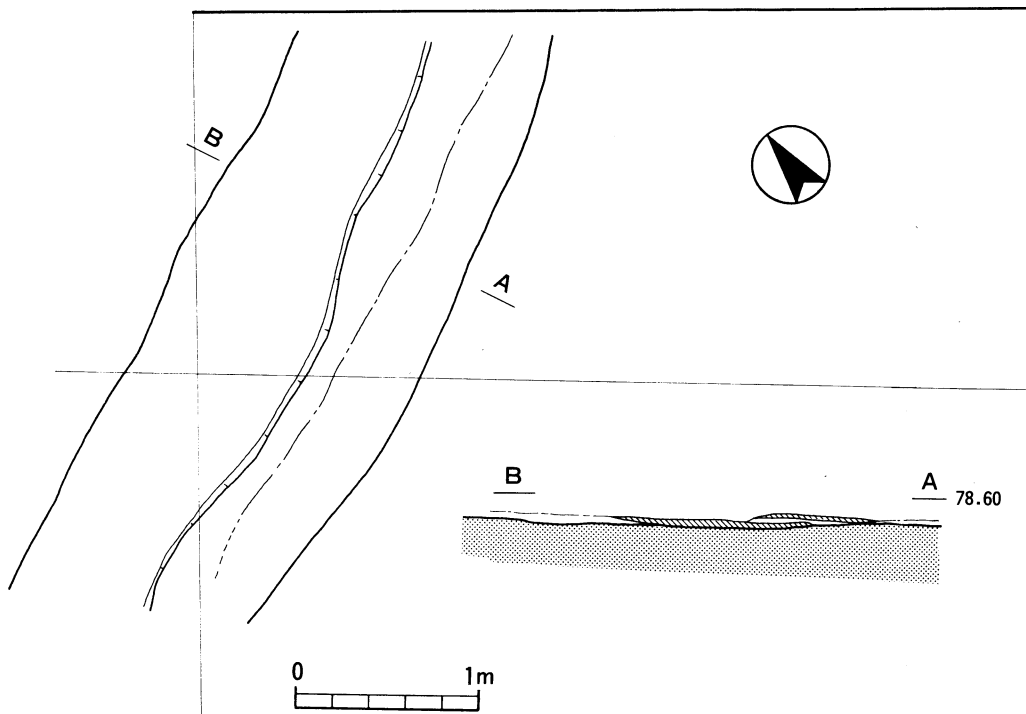
F-15, 16区にかけて、東西方向に伸びる。西側はガケ方向に向かっている。IV層上面で検出した。遺物はまばらで、少量出土した。

(7) 古道跡

D, E-5, 6区にまたがって、南北方向へ、上下に重複して検出された。上の古道跡は、幅がもう少し広がったが、検出に際して東西から固い面を追っていったため西側を掘り過ぎてしまったものである。上下の古道跡間に間層の堆積はなく、接近した時期のものである。下の古道跡に青磁片が踏み込まれており、時期としては、鎌倉・室町期以後のものと思われる。



第15图 沟状遺構



E-4区 E-3区 第16図 古道跡

第3節 遺物

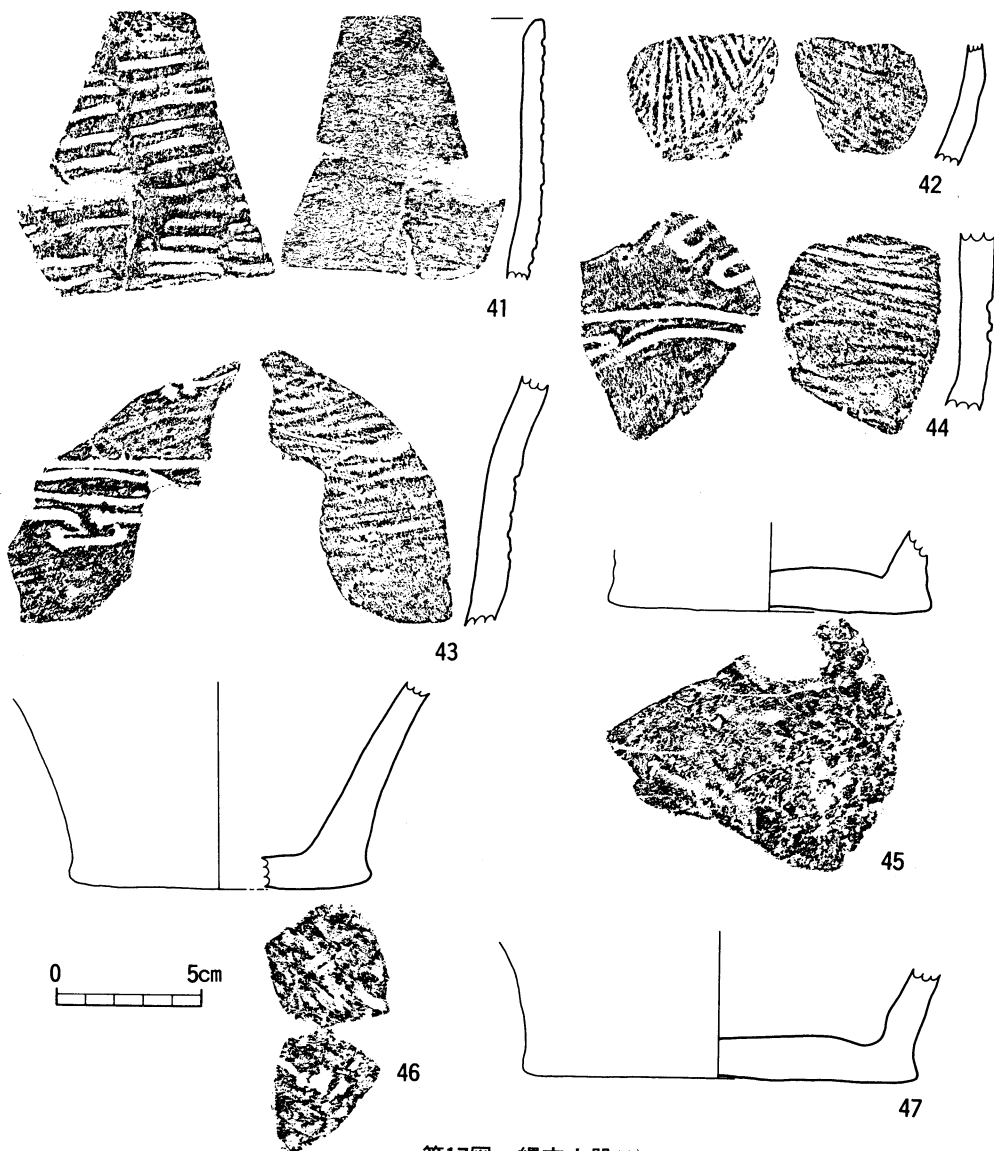
(1) 土器

縄文時代

縄文時代の土器は調査地域全体で出土したが、晩期の土器が多く、他の時期のものはわずかであった。Ⅶ層下部の土器はF-21・22区にみられ、縄文時代晩期の土器はC・D-4・5区に集中してみられた。

41～47は晩期以外の土器である。

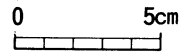
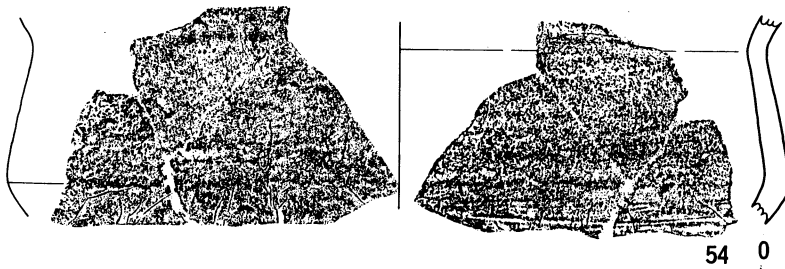
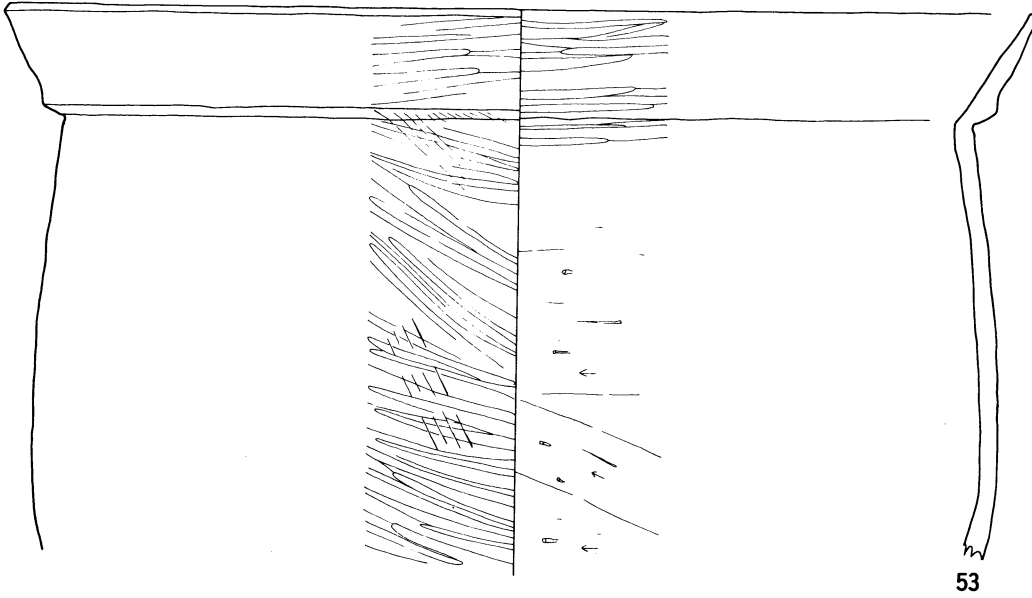
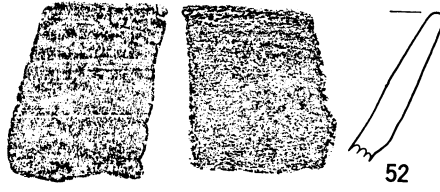
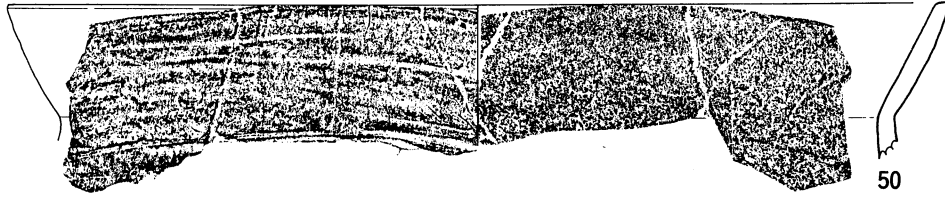
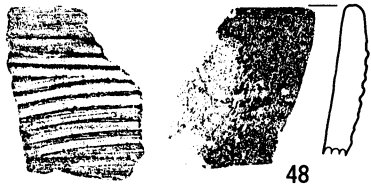
41は内傾気味にたちあがり、口唇部付近でわずかに外傾するもので、胴部外面には、先端にやや丸みのあるヘラ状施文具による横位の短沈線の組合せ文様をほぼ全面に施している。42は外面に縦位の荒い貝殻条痕を施し、内面は横位に貝殻条痕による整形の後、ナデ整形を行っているもので、底部近くである。43・44は凹線で文様を構成するもので、端部を深く施文している。内面は貝殻条痕を施している。施文は2列に施されている。45・46はⅦ層より出土した底部である。45は底面に圧痕を残しているもので、平底である。底部の器形は、底端部からわずかにくびれて開くもので内外面ともに丁寧なナデ調整を施している。46は底面に木葉痕を残しているもので、中央がわずかに窪んでいる。底端部からわずかにくびれて開くものである。47はD-6区、Ⅶ層から一括して出土したものであるが、復元できず器形は不明である。底部は底面を丁寧なナデ整形により調整した平底で、底端部からわずかにくびれて開くものである。



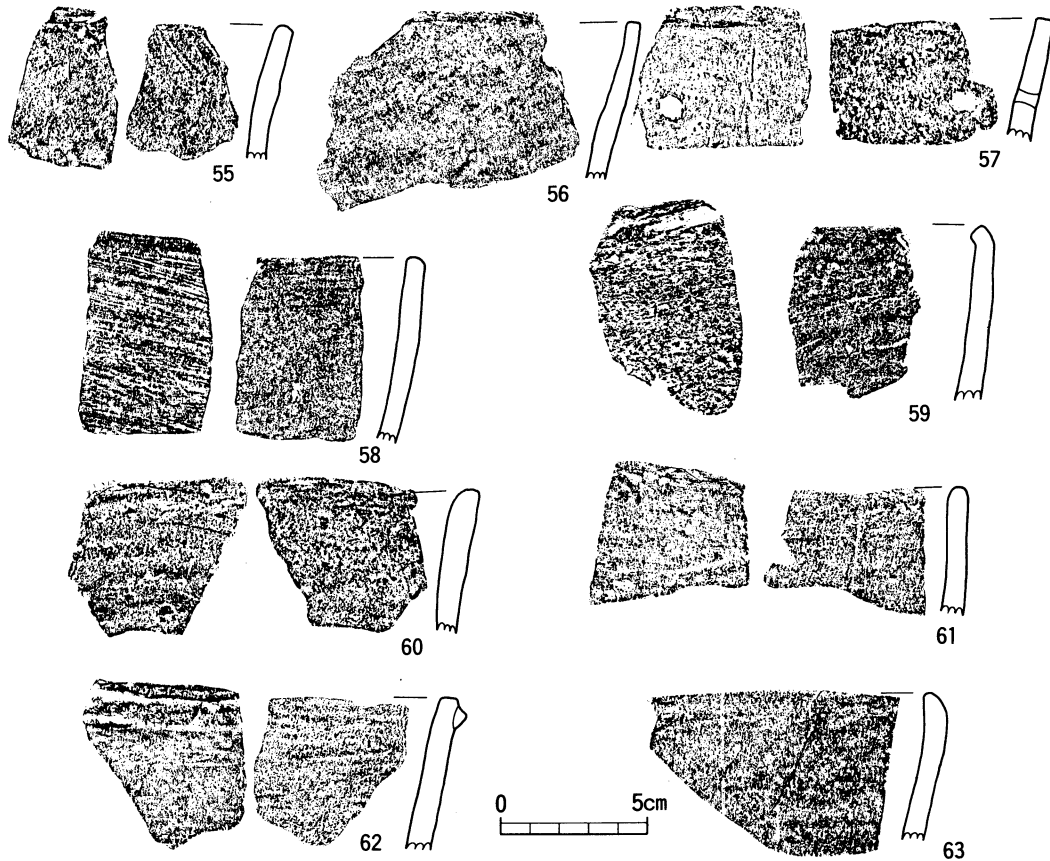
第17図 縄文土器(1)

深鉢 (第18・19図, 48~63)

54は頸部から胴部にかけてのもので、その他は口縁部である。48~52は口縁部が外反し、頸部と胴部で「く」字状に折れる器形をもつ。48は板状施文具による粗いハケ目が横方向に施されている。49~52は雑な沈線を横位に施した口縁部である。53はヘラ研磨が施されているもので内面も口縁付近は研磨されている。口縁部は外反し、頸部直上に断面三角形の突起が巡っている。54は肩部に稜をもつもので、ヘラナデを横位に施し内面には条痕がある。55~61は口縁部が外反し頸部と肩部で「く」字状に折れる器形である。57には穿孔が施されている。62は口縁



第18図 縄文土器(2)



第19図 縄文土器(3)

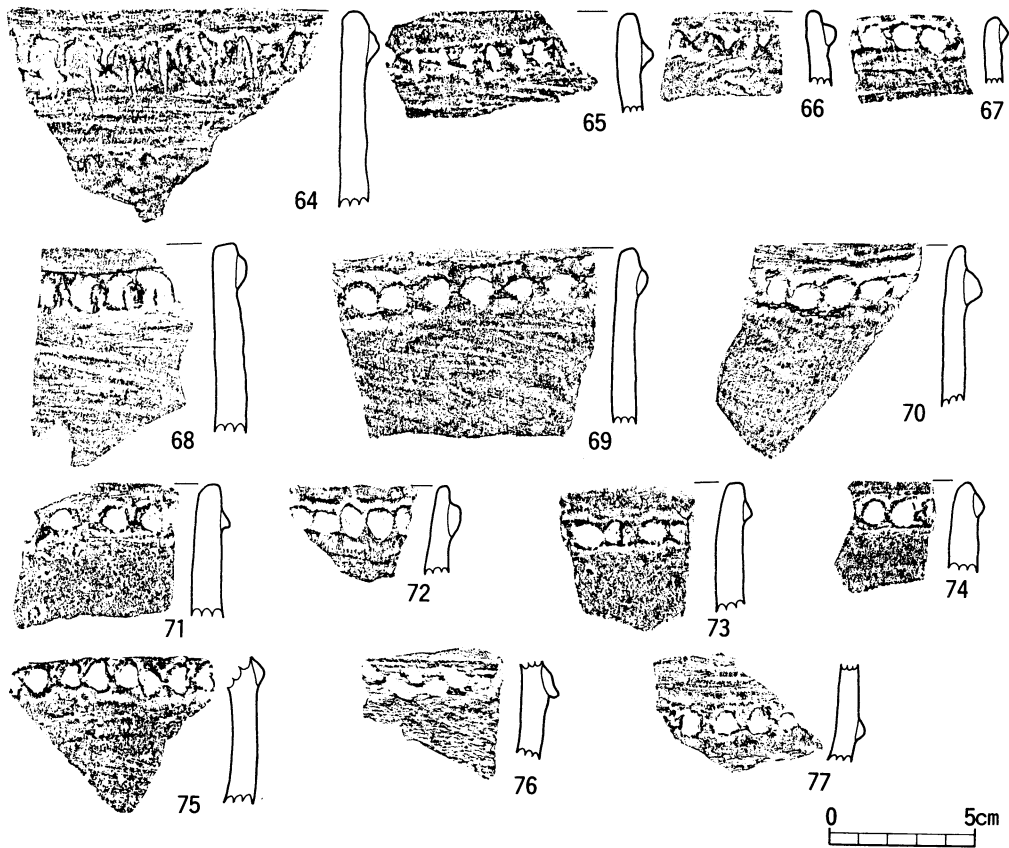
部直下に断面三角形の突起が1条巡らされている。63は胎土に金雲母が含まれるもので、口縁部が内湾する深鉢である。

刻目突帯文(第20図・64~77)

64~77は刻目突帯文をもつ口縁から胴部にかけての破片である。胴部最長部で鈍く「く」字状に屈折し、口縁部は内傾気味で、口縁端でわずかに外反するものが多い。器面の内外面はナデ仕上げである。口縁端直下と胴部最長部に貼付け刻目突帯が施されている。突帯の刻みの方法は指頭押圧とヘラ刻みがある。指頭の押圧によって「○」字状に窪むものが大多数であるが64は指頭押圧の後、鋭利なヘラ状工具によって縦方向に深く刻まれている。65は断面三角形の突帯文にヘラ刻みが施されている。69・70はヘラ状施文具によるケズリとミガキがある。75~77は胴部最長部の貼付け刻目突帯である。

浅鉢(第21・22図、78~96)

78~89は粗製浅鉢である。78は直口气味の口縁をもつもので、胴部屈曲部に凹線が施されている。79はふくらみをもつ口縁部で内外面とも丁寧なナデ整形である。80は外反するややふくらむ口縁部である。ナデ整形が施されている。86・87はやや内湾する口縁部であり、内外面と



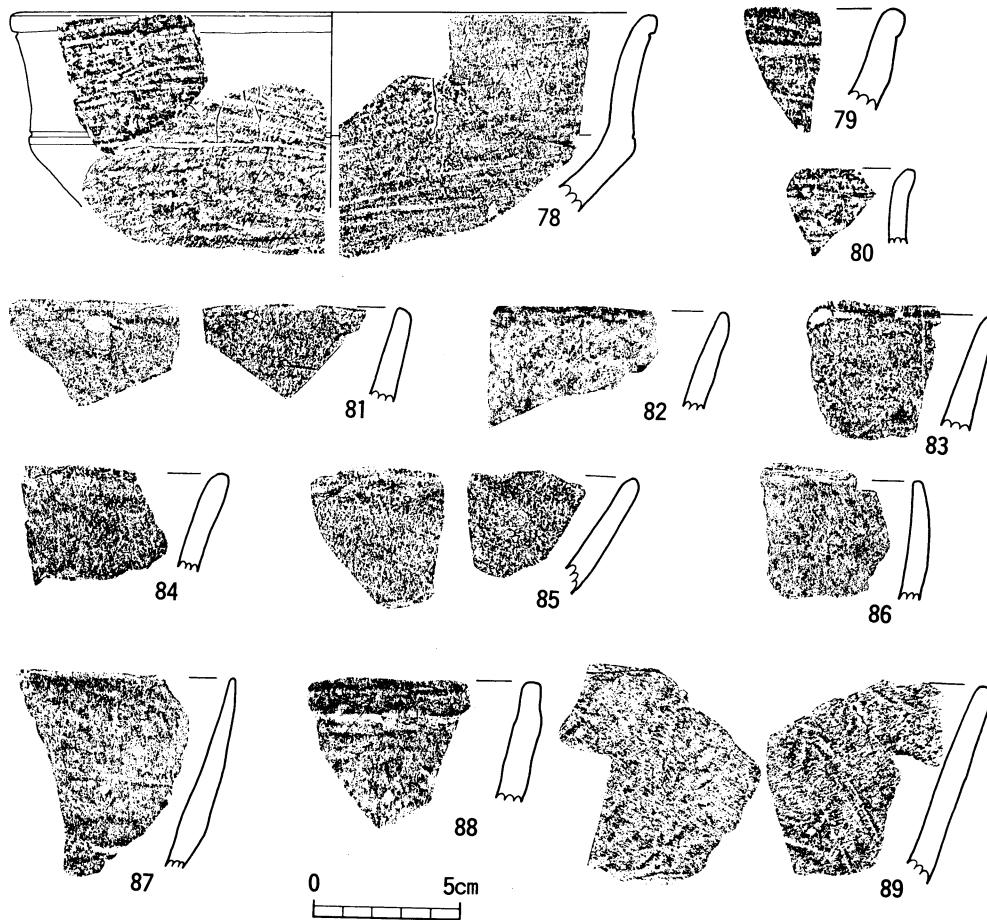
第20図 縄文土器(4)

もナデ整形が施されている。88は直行する口縁部である。

90~96は内外面とも研磨された精製浅鉢である。90は外反し玉縁状になる口縁部で、内外面はヘラ研磨で整形されている。91は比較的長い口縁部をもつものである。92は口縁部端が丸みを帯び、口縁部外面には1条の沈線が施されている。口縁接合部の内面に僅かに稜線がみられる。93・94は比較的長い胴部から頸部がくびれ短い口縁部が開くもので、内外面とも丁寧なヘラ研磨が施されている。椀形(マリ形)の浅鉢形土器に属するものである。95は直口気味の口縁をもつもので、胴部屈曲部に凹線が施されている。90~95は口径がそれぞれ29.6cm, 22.0cm, 24.8cm, 20.5cm, 28.0cm, 19.9cmを測る。96は頸部と肩部が「く」字状に直線的に折れるもので、肩部が長く胴部に稜線状にリボン状貼付けがある。

椀形(マリ形)土器(第23図, 97~99)

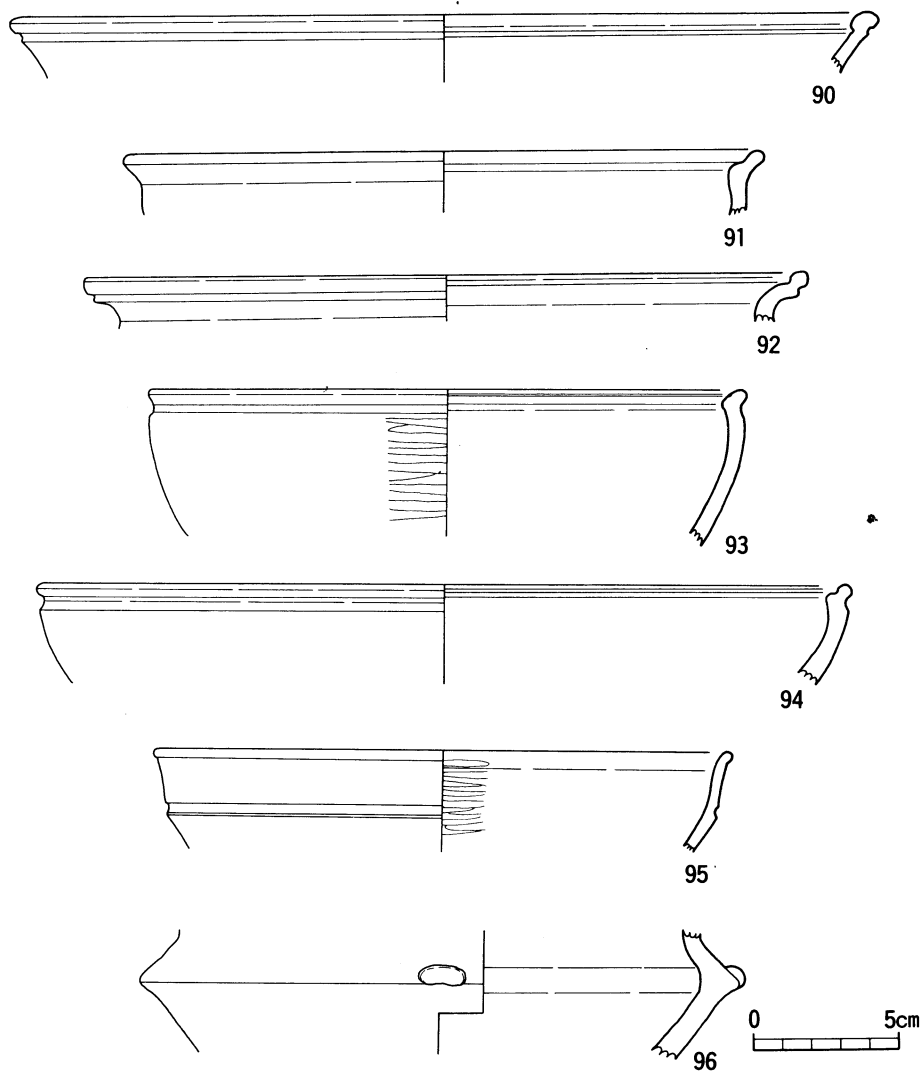
97・98は小型の椀形土器で直口する口縁をもつもので、内外面とも丁寧なヘラ研磨が施されている。99も同様の椀形土器の底部である。底部は平底であり外面は丁寧なヘラ研磨が施されているが内面はナデ整形が行われている。



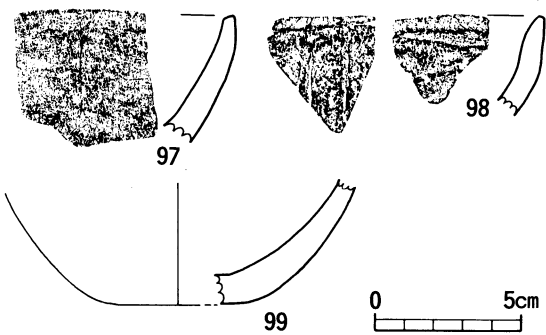
第21図 縄文土器(5)

組織痕土器 (第24・25図, 100~121)

組織痕土器には圧痕の種類として網目, 蓆目, 布目, 籠目の4種類が知られているが, 今回の調査では網目, 蓆目の2種が出土した。100~107は網目圧痕の組織痕土器である。100は口縁上部が欠けているが, 径36cm以上の口径をもつ土器である。底部の網目の組織痕と口縁部の境はやや屈曲している。101~107は胴部ないし底部であり, 内面は丁寧なヘラナデ調整である。網目の一節の長さは, それぞれ0.3, 0.4, 0.4, 0.3, 0.5, 0.3, 0.4, 0.4, 0.3, 0.4, 0.3, 0.3, 0.5, 0.3, 0.5, 0.5 cmを測る。108~121は蓆目圧痕のある胴部ないし底部である。108, 112は緯糸が1cmに5~8本入り, 径糸は110が0.8cmでその他は1.0cmを測り, 内面をヘラナデ調整するものである。113は内面を貝殻条痕で調整したもので, 金雲母を多く含んでいる。径糸0.4cm, 緯糸は1cmに8本入っている。114, 116の内面は丁寧なヘラナデである。118~121は蓆目

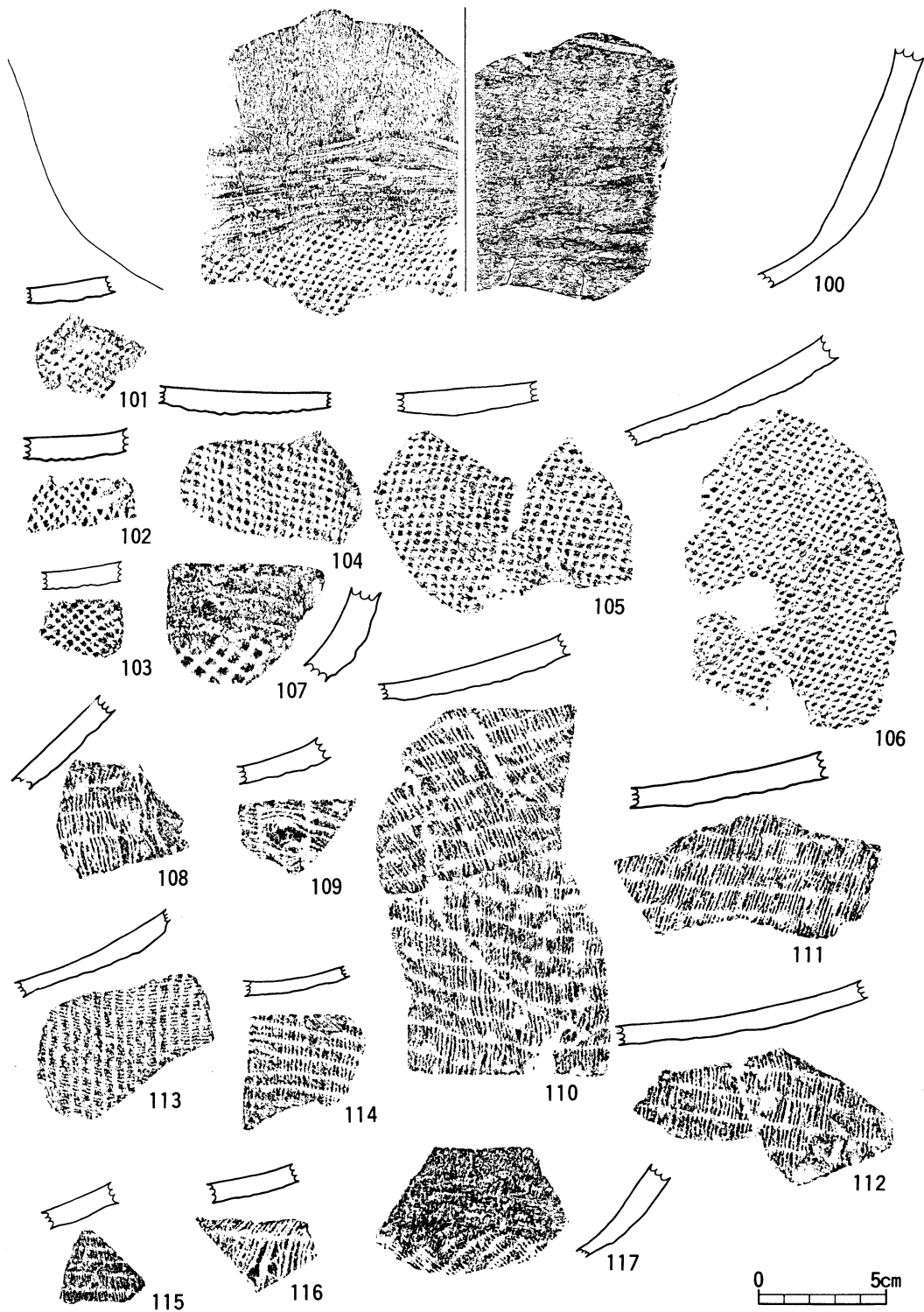


第22図 縄文土器(6)

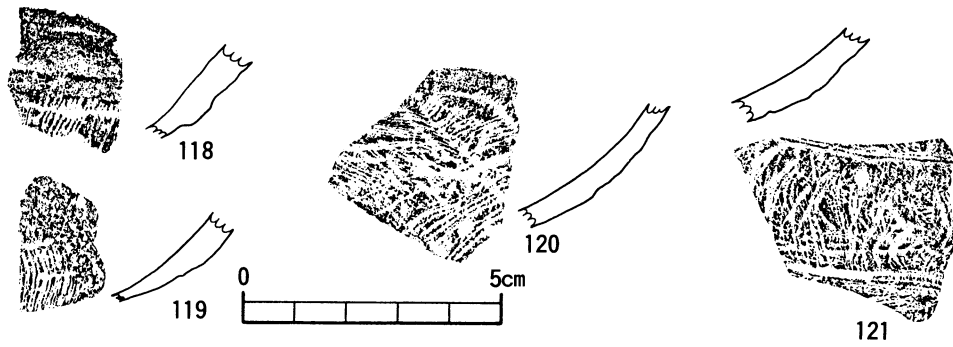


第23図 縄文土器(7)

圧痕の胴部から底部へかけての部位である。緯糸は整然としていない。組織痕土器の器面調整は内面がヘラ研磨で、外面が組織痕とヘラナデ調整である。



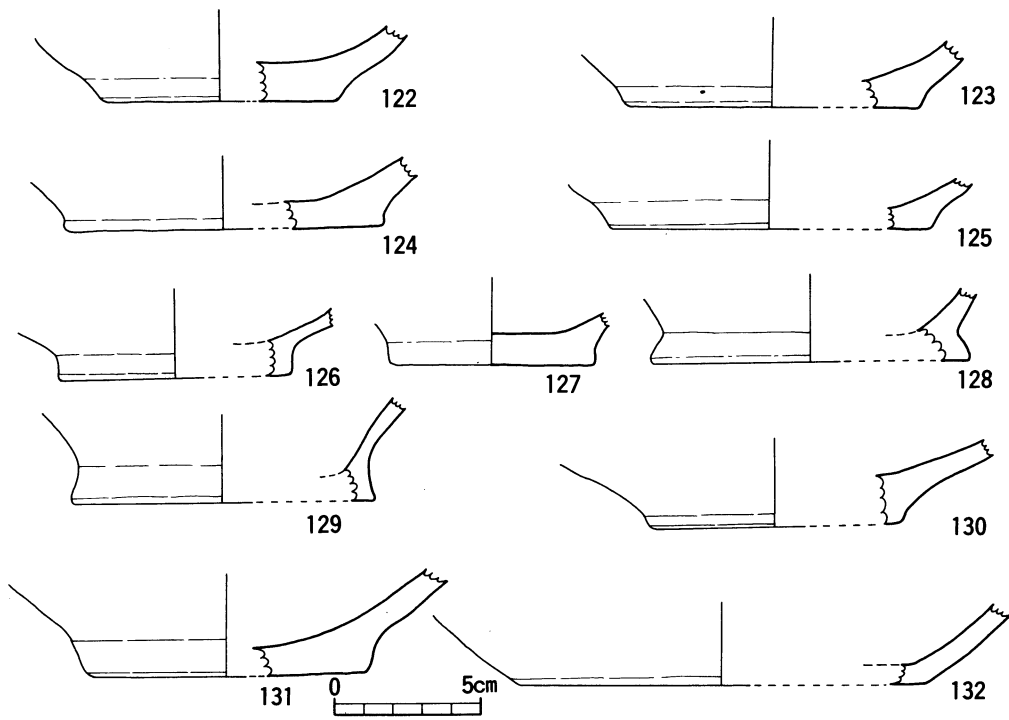
第24図 繩文土器(8)



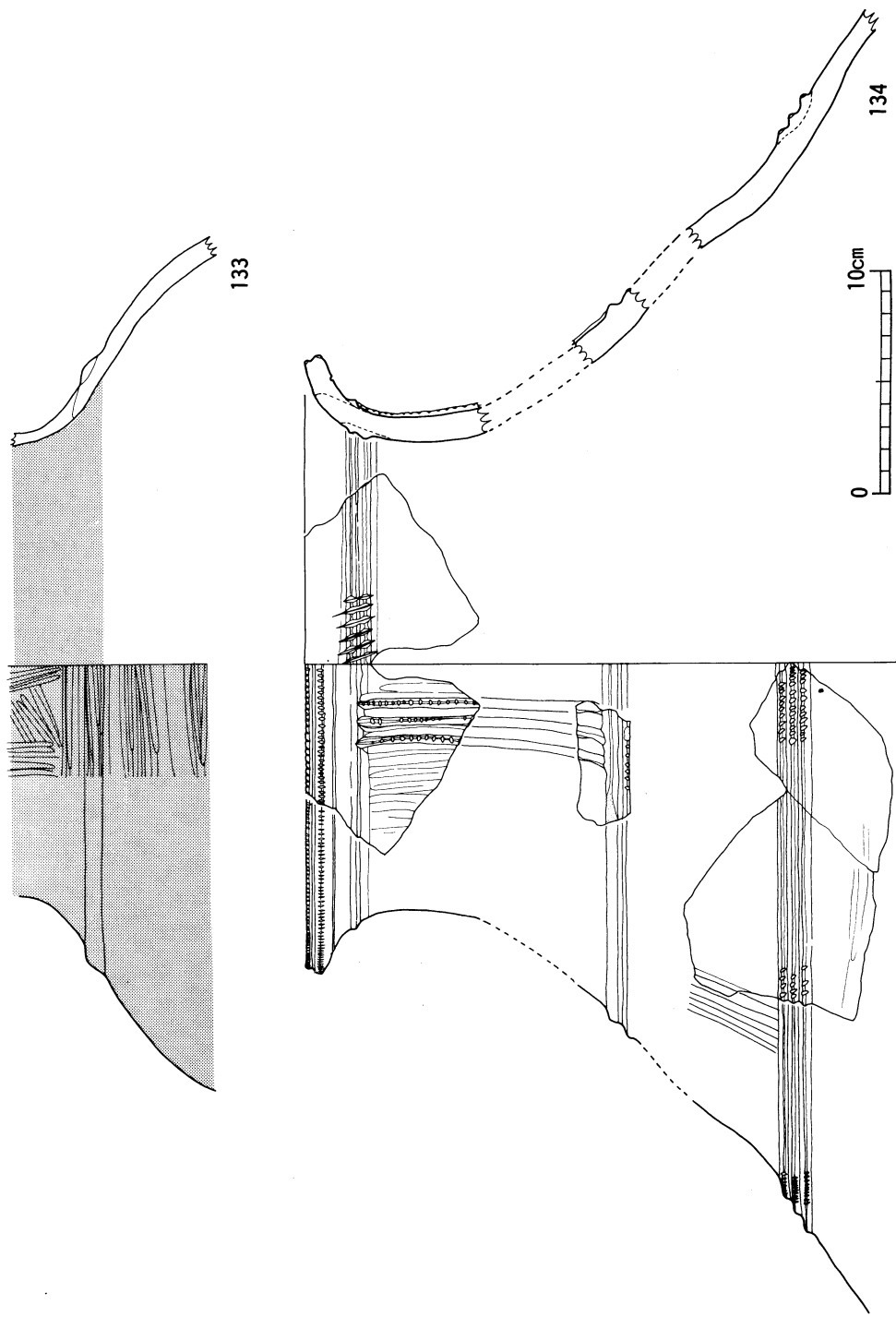
第25図 縄文土器(9)

底部 (122~132)

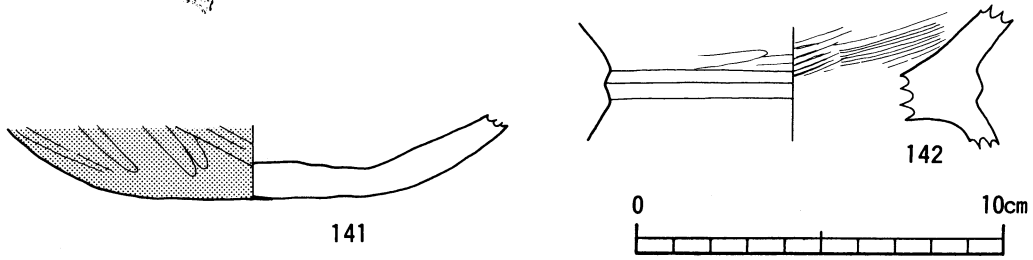
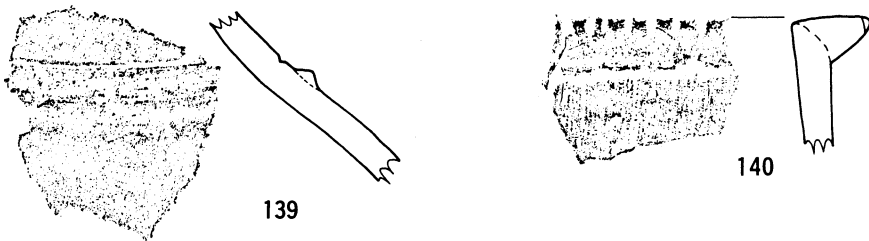
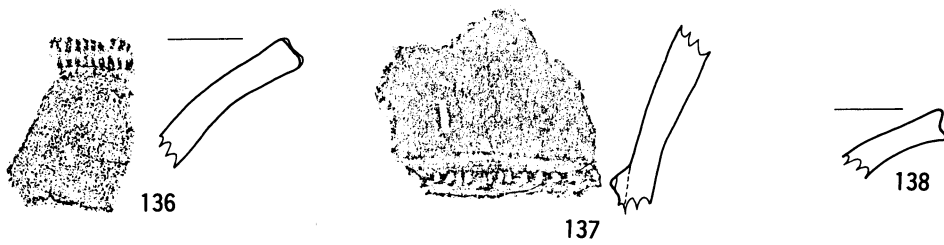
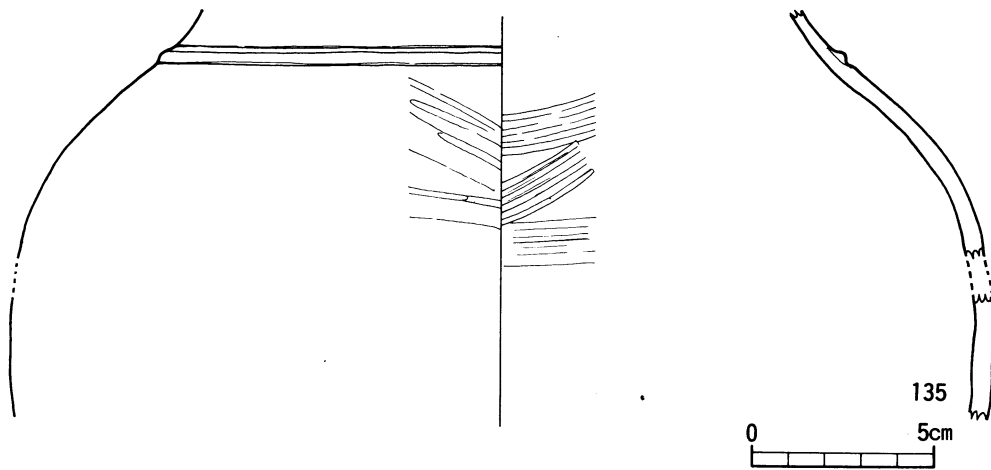
深鉢形土器・浅鉢形土器など器種による分類が困難なため、ここでは一括して取り上げた。全て平底であり、底部からすぐ外開きの胴部に移行するもの(122~125・130) 接地面からわずかに立ち上がり外開きになるもの(126・127・131), 外方へ大きく張りだし円板はりつけ状になるもの(128・129)などに細分することができる。ほとんどは、粗製の土器であるが132は内外面とも丁寧な研磨がなされ浅鉢の可能性が強い。これらの底部の中には、縄文晩期終末のものも含まれている。



第26図 縄文土器(10) 底部



第27図 弥生土器(1)



第28図 弥生土器(2)

弥生時代

壺形土器 (133~139・141)

133は、頸部に貼り付け突帯を有し、口縁部は直立気味か、やや外反気味に立ち上がるものと考えられる。外面には丹が塗られ、内面は器壁が荒れて剥落しているが、頸部下まで丹塗りの痕跡がうかがわれる。134は、赤褐色を呈し、外反する口縁部の内側に2条の貼り付け突帯を巡らし、ヘラにより、部分部分(1/4~1/6周ごとに?)刻目が施されている。口縁部端は、外側に平坦面をつくり、沈線を1条いれて、上下に別々に小さな刻目をつけている。外側は、口縁部下に沈線が1条はいる、その下に横位に突帯が、順に1条、2条、3条と胴部にかけて貼り付けられて、その間は3条の縦位の突帯でつながれている。縦位突帯と、横位の突帯の部分部分に小さな刻目が施されている。突帯の両側はヘラで押さえられている。135・139は、頸部に断面三角形の貼り付け突帯のつく破片である。139は突帯の上に沈線がめぐらされている。133と135は、同一個体の破片を多数出土したが、割れ口の摩耗が激しく接合・復元が難しかった。136は、口縁部端部にヘラ刻目が施されている。137は内側に小さな刻目をつけた断面三角形の突帯が貼り付けられている。141は、底部にあたり、大部分剥落しているが、丹塗りの痕跡がある。

甕形土器 (140)

口縁部に刻目突帯が貼り付けられ、逆L字状に平坦面がつくられた甕形土器である。高環の坏部と脚部のつなぎのところで、突帯が三角形に削り出されている。

古墳時代

壺形土器 (143~152・172~174)

143は、絡縄突帯といわれるものである。144は、半截竹管による刺突が上下2段に逆方向に施されている。146は、突帯のつなぎめにあたり、余った部分が下垂している。147~152は胴部突帯で、149の竹管による刺突文を除き、ヘラによる沈線が施されている。172~174は底部である。172は丸底、173、174は平底が小さく残っている。173は、ヘラによる調整がうかがえる。

甕形土器 (153~169・176~178)

153は、内湾気味に直口する口縁部の破片である。口縁部端は内側に面をつくる。154~169は、いずれも頸部の突帯で、指頭による成形の跡が顕著である。刻目も大まかである。163は、木口状の施文具で施されている。166は、刻目に布目圧痕が残る。176~178は脚台部で外側に下から上へ削り痕がある。脚内部は、ヘラ状工具によって掻き取られ、中央部が突起している。

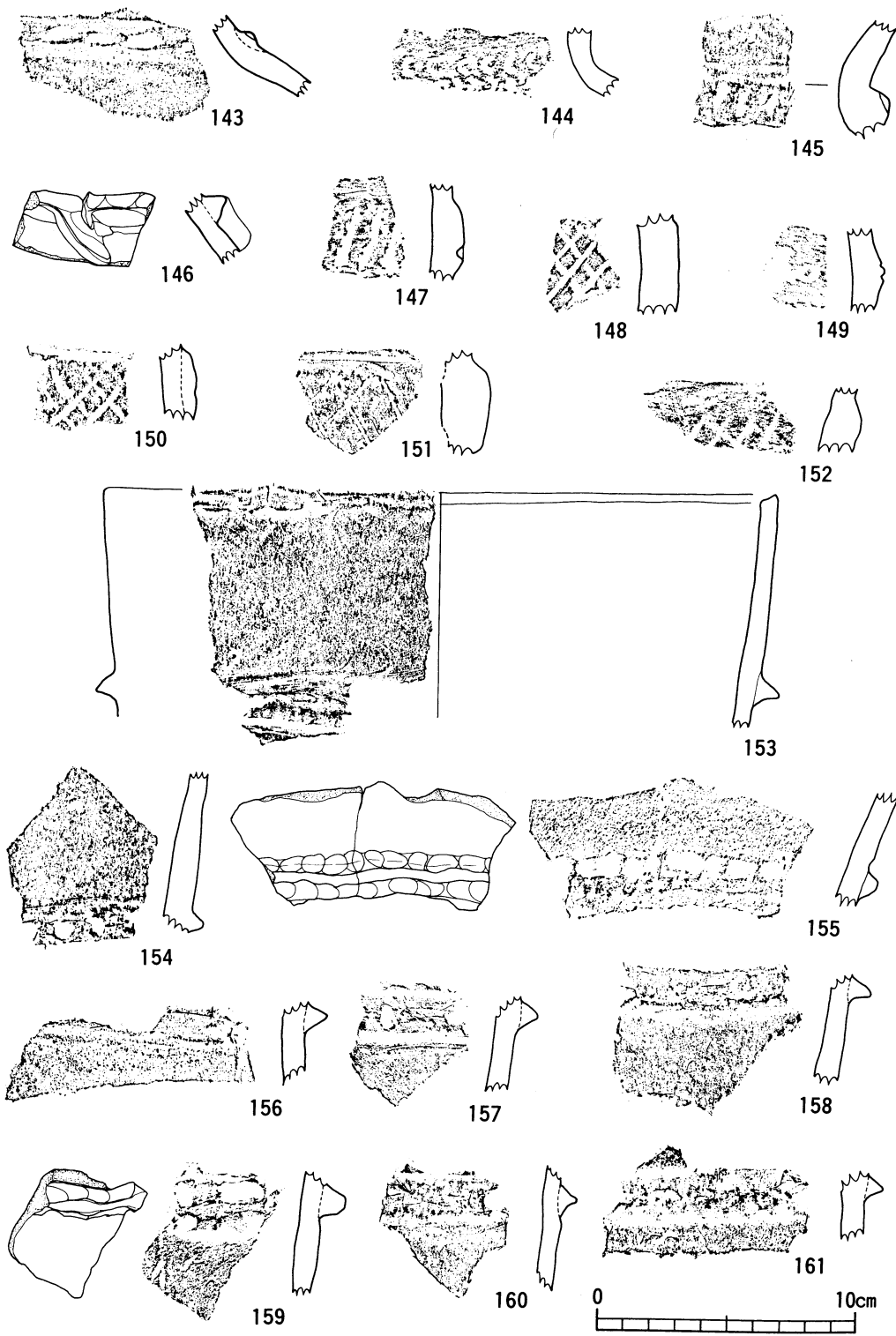
高環形土器 (171・175)

171は、高環の坏部で、内外面を丁寧にヘラで研磨され、外側には丹が塗られている。175は脚部にあたり、丹が塗られ、ヘラミガキされている。

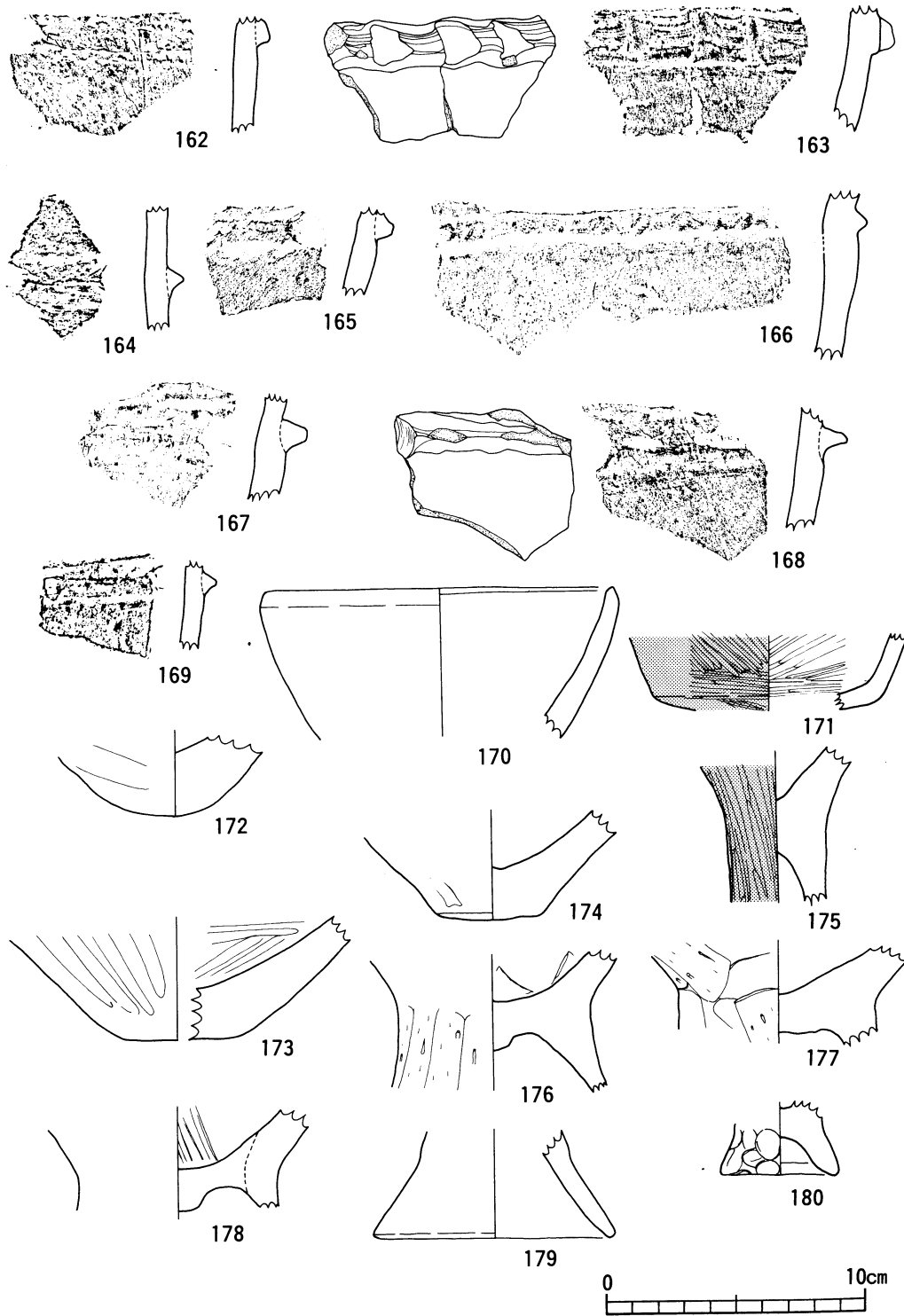
その他、小型鉢 (170)・鉢の脚端部 (179・甕の可能性もある)・手づくね様の脚台 (180)が出土している

須恵器 (181~196)

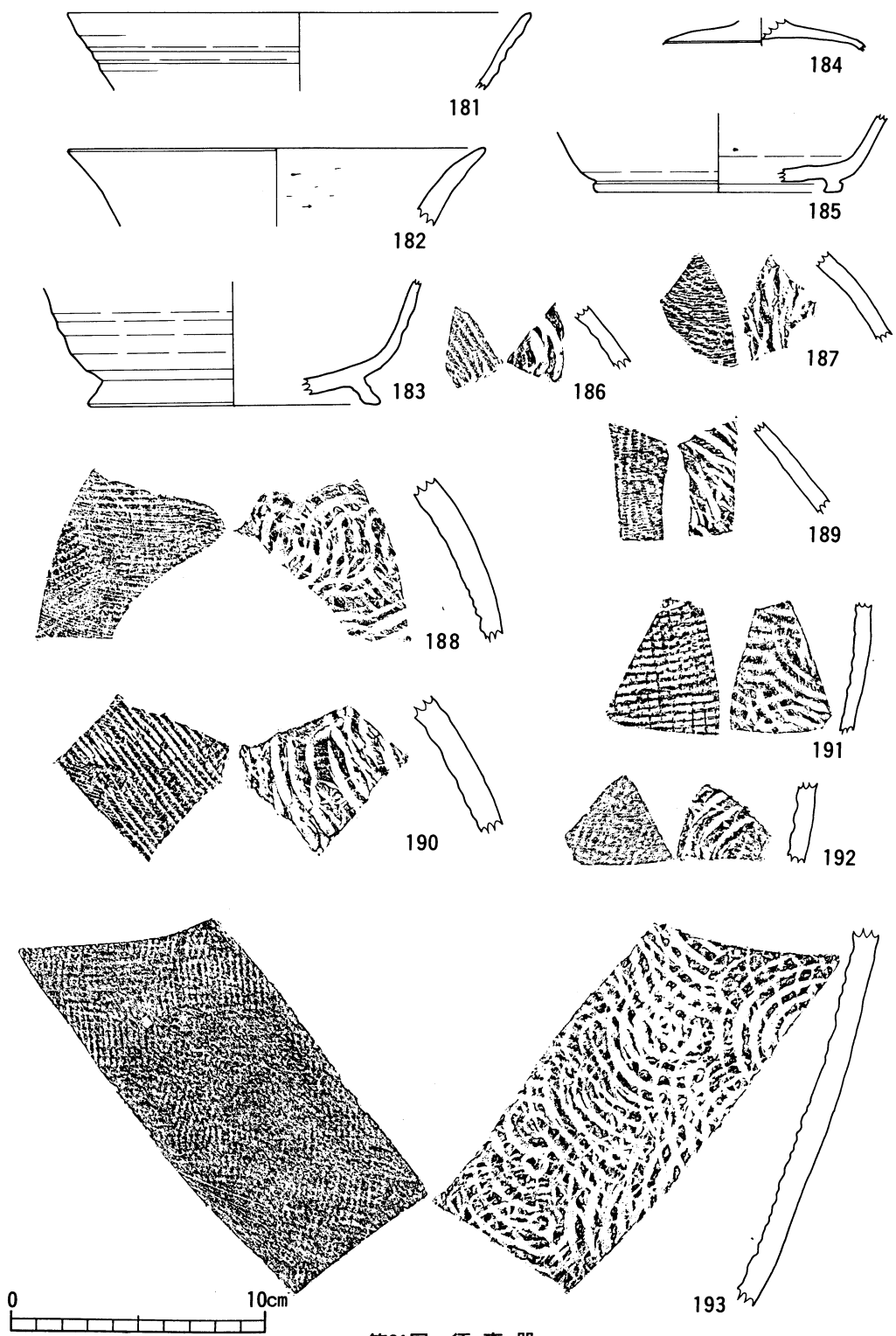
181・182・183・185は、坏で高台がつく。184は蓋で灰釉がかかり、欠損しているが、つまみ



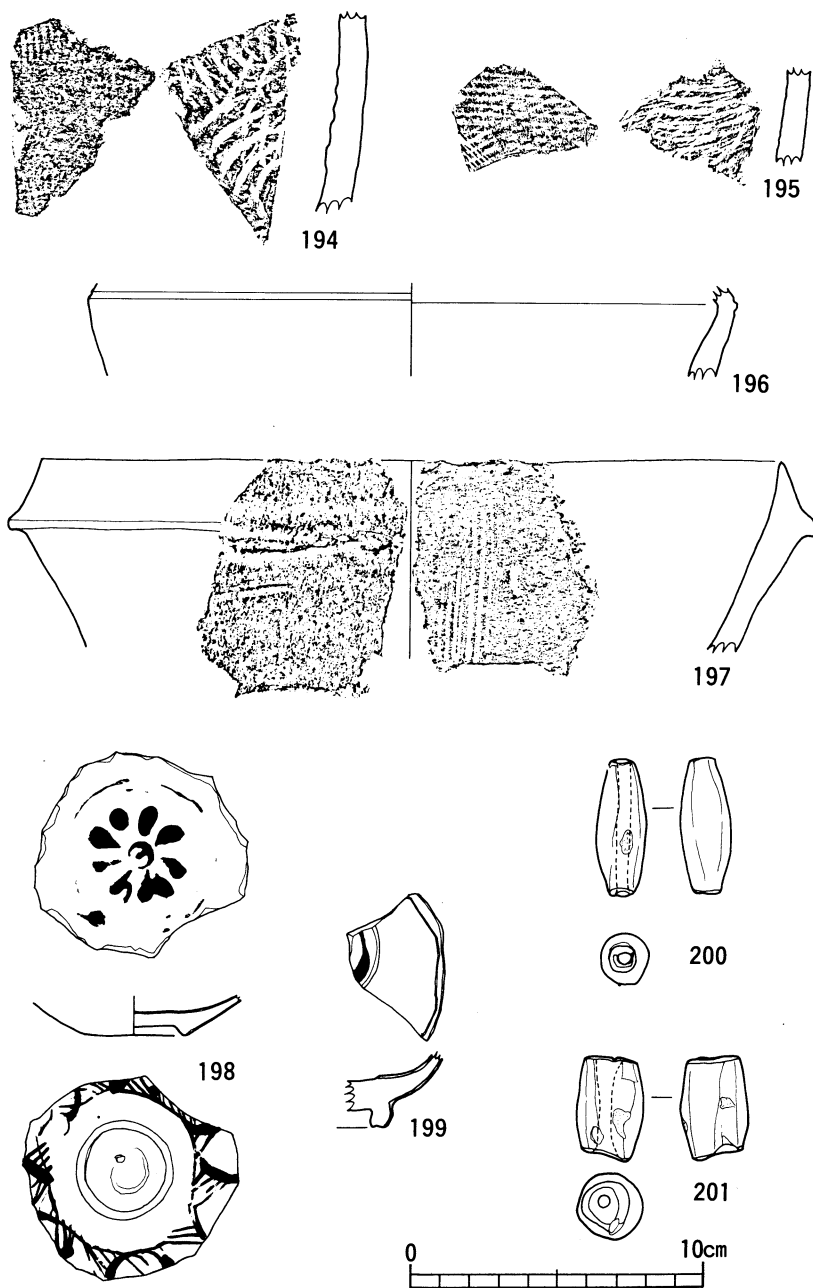
第29図 古墳時代の土器(1)



第30図 古墳時代の土器(2)



第31図 須恵器



第32図 中・近世の遺物

がつくものと思われる。186～195は、胴部の破片で、外側に平行タタキ・格子目タタキを、内側に同心円タタキが行われている。196は、壺か瓶の肩にあたる。

中・近世 (197～201)

197はすり鉢, 198は染め付け, 199は青磁である。200・201は土錘で、重さが200が16g, 201が18gをはかる。

第2表 縄文土器観察表(1)

番号	出土地	色調	焼成	胎土	備考
41	F-21	茶褐色	良好	石英・長石・角閃石	曾畑式
42	F-14	茶褐色・黒色	普通	石英・長石	轟式
43	F-21	茶褐色・黄褐色	普通	石英・長石・角閃石	
44	F-21	茶褐色・黄褐色	普通	石英・長石・角閃石	
45	E-7	淡赤褐色	普通	石英・長石・角閃石	底部
46	F-21	黄褐色	普通	石英・長石・金雲母	底部
47	E-6	淡茶褐色	普通	石英・長石・角閃石	底部
48	F-22	淡茶褐色・茶褐色	良好	石英・長石・角閃石	深鉢・口縁
49	F-22	淡茶褐色・褐色	良好	石英・長石	深鉢・口縁
50	F-21	茶褐色・淡茶褐色	良好	石英・長石	深鉢・口縁
51	F-21	茶褐色・暗茶褐色	良好	石英・長石	深鉢・口縁
52	F-22	茶褐色	普通	石英・長石・角閃石	深鉢・口縁
53	F-21	橙褐色・暗褐色	良好	石英・長石・角閃石	深鉢・口縁
54	F-21	暗茶褐色・淡赤褐色	普通	石英・長石	深鉢
55	E-6	淡茶褐色・黒褐色	良好	石英・長石	深鉢・口縁
56	E-6	暗褐色・黄褐色・	良好	石英・長石	深鉢・口縁
57	D-4	暗褐色・茶褐色	良好	石英・長石	深鉢・口縁
58	F-18	暗褐色	良好	石英・長石	深鉢・口縁
59	E-4	褐色・暗茶褐色	普通	石英・長石・角閃石	深鉢・口縁
60	F-17	黄褐色・暗褐色	良好	石英・長石	深鉢・口縁
61	F-18	暗茶褐色・茶褐色	普通	石英・長石・角閃石	深鉢・口縁
62	F-22	暗黄褐色	普通	石英・長石・角閃石	深鉢・口縁
63	F-21	茶褐色・淡茶褐色	良好	石英・長石・金雲母	深鉢・口縁
64	D-5	暗茶褐色・褐色	普通	石英・長石・角閃石	刻目突帯・口縁
65	D-4	暗褐色・褐色	普通	石英・長石・角閃石	刻目突帯・口縁
66	E-4	暗褐色・褐色	普通	石英・長石・角閃石	刻目突帯・口縁
67	D-4	暗褐色・暗褐色	普通	石英・長石・角閃石	刻目突帯・口縁
68	D-5	暗褐色・黄褐色	普通	石英・長石・角閃石	刻目突帯・口縁
69	D-5	黒褐色・茶褐色	普通	石英・長石・角閃石	刻目突帯・口縁
70	D-4	黒褐色・茶褐色	普通	石英・長石・角閃石	刻目突帯・口縁
71	D-5	暗茶褐色・淡茶褐色	普通	石英・長石	刻目突帯・口縁

第3表 縄文土器観察表(2)

番号	出土地	色調	焼成	胎土	備考
72	D-4	暗茶褐色・褐色	普通	石英・長石	刻目突帯・口縁
73	D-4	暗茶褐色・黄褐色	普通	石英・長石	刻目突帯・口縁
74	D-5	茶褐色・淡茶褐色	普通	石英・長石・角閃石	刻目突帯・口縁
75	E-4	淡茶褐色・淡赤褐色	普通	石英・長石	刻目突帯・口縁
76	F-14Ⅶ	黒褐色・暗黄褐色	普通	石英・長石	刻目突帯・口縁
77	E-4	淡茶褐色・暗黄褐色	普通	石英・長石	刻目突帯
78	D-5	暗褐色・褐色	普通	石英・長石	浅鉢・口縁
79	F-18	淡茶褐色	普通	石英・長石・角閃石	浅鉢・口縁
80	D-4	暗褐色	普通	石英・長石・角閃石	浅鉢・口縁
81	F-22	暗茶褐色・淡褐色	良好	石英・長石	浅鉢・口縁
82	E-4	暗褐色・黄褐色	良好	石英・長石	浅鉢・口縁
83	E-6	黒褐色・褐色	普通	石英・長石	浅鉢・口縁
84	F-21	暗黄褐色	普通	石英・長石・角閃石	浅鉢・口縁
85	D-5	黒褐色・暗褐色	普通	石英・長石	浅鉢・口縁
86	D-6	黒褐色・褐色	良好	石英・長石	浅鉢・口縁
87	F-22	黄褐色	良好	石英・長石	浅鉢・口縁
88	F-20	暗黄褐色・淡茶褐色	普通	石英・長石・角閃石	浅鉢・口縁
89	E-5	黒褐色・黒褐色	普通	石英・長石	浅鉢・口縁
90	F-22	灰褐色・灰褐色	良好	石英・長石	浅鉢・口縁
91	F-22	淡茶褐色・淡茶褐色	良好	石英・長石	浅鉢・口縁
92	F-23	淡橙褐色	良好	石英・長石	浅鉢・口縁
93	F-22	暗灰褐色・灰褐色	良好	石英・長石・角閃石	浅鉢・口縁
94	E-6	黒褐色	良好	石英・長石	浅鉢・口縁
95	D-4	黒褐色・淡茶褐色	良好	石英・長石・角閃石	浅鉢・口縁
96	E-5	黄褐色	普通	石英・長石	浅鉢
97	F-4	褐色・暗褐色	良好	石英・長石・角閃石	マリ形・口縁
98	E-4	暗褐色・淡褐色	良好	石英・長石・角閃石	マリ形・口縁
99	E-5	黒色・黄褐色	良好	石英・長石・角閃石	マリ形
100	D-4	黒褐色・黒灰褐色	普通	石英・長石	組織痕・網目
101	E-4	褐色・黒褐色	普通	石英・長石	組織痕・網目
102	DE-4	褐色・黒褐色	普通	石英・長石	組織痕・網目

第4表 縄文土器観察表(3)

番号	出土地	色調	焼成	胎土	備考
103	D-4	褐色・黒褐色	普通	石英・長石	組織痕・網目
104	D-4	褐色・黒褐色	普通	石英・長石	組織痕・網目
105	D-4	褐色・黒褐色	普通	石英・長石	組織痕・網目
106	D- ³ / ₄ ・ ⁴ / ₄ E-4	暗褐色・黒褐色	普通	石英・長石	組織痕・網目
107	F-14	赤褐色・暗褐色	普通	石英・長石	組織痕・蓆目
108	D-4	淡黄褐色・黒褐色	普通	石英・長石	組織痕・蓆目
109	E-4	淡黄褐色・黒褐色	普通	石英・長石	組織痕・蓆目
110	D-4	淡黄褐色・暗褐色	普通	石英・長石	組織痕・蓆目
111	E-4	淡黄褐色・黒褐色	普通	石英・長石	組織痕・蓆目
112	E-4	淡黄褐色・黒褐色	普通	石英・長石	組織痕・蓆目
113	B-15	茶褐色・暗褐色	良好	石英・長石・金雲母	組織痕・蓆目
114	D-4	茶褐色・黒褐色	良好	石英・長石	組織痕・蓆目
115	E-4	褐色・茶褐色	普通	石英・長石	組織痕・蓆目
116	E-4	茶褐色・暗茶褐色	普通	石英・長石	組織痕・蓆目
117	D-4	茶褐色・暗茶褐色	普通	石英・長石	組織痕・蓆目
118	E-6	黒褐色・黄褐色	普通	石英・長石	組織痕・蓆目
119	E-6	淡赤褐色・暗褐色	普通	石英・長石	組織痕・蓆目
120	D-4	淡赤褐色・暗褐色	普通	石英・長石	組織痕・蓆目
121	D-4	暗褐色・淡赤褐色	良好	石英・長石	組織痕・蓆目
122	F-21	褐色	普通	石英・長石	底部
123	F-22	淡赤褐色・黒褐色	普通	石英・長石・角閃石	底部
124	F-21	暗茶褐色・黄褐色	普通	石英・長石	底部
125	F-19・20	赤褐色・黄褐色	普通	石英・長石・角閃石	底部
126	D-6	淡茶褐色	普通	石英・長石・金雲母	底部
127	F-21	淡茶褐色・褐色	普通	石英・長石・角閃石	底部
128	E-6	淡赤褐色	普通	石英・長石・角閃石	底部
129	F-15	淡茶褐色・暗黄褐色	普通	石英・長石・角閃石	底部
130	F-21	淡褐色・暗茶褐色	普通	石英・長石・角閃石	底部
131	F-21	淡赤褐色・黄褐色	普通	石英・長石	底部
132	E-4	暗茶褐色	普通	石英・長石・角閃石	底部・浅鉢

第5表 土器観察表(1)

番号	出土地点	調整	色調	焼成	胎土	備考
1	F-14 1号住	ヘラミガキ	黄褐色	良好	石英・角閃石・長石・ 細礫	器壁荒れ剥落, 浅鉢
2	F-15 1号住	ヘラミガキ	淡赤褐色	良好	〃 〃	壺, 口縁部
3	F-15 1号住	ヘラミガキ	黒色研磨	良好	石英・細砂粒・細礫	小壺
4	F-15 1号住	ケズリ	茶褐色	良好	石英・長石, 砂粒多し	
5	F-15 1号住	貝殻条痕	赤褐色	良好	石英・角閃石・長石・ 細砂粒	
6	F-15 1号住	ナデ	黄白色	良好	石英・細礫	
7	F-15 1号住	外一条痕 内ナデ	暗茶褐色	良好	石英・角閃石・長石・ 細砂粒	
10	E-7・8 2号住	ヨコナデ, ハケ目	赤色	良好	石英・角閃石・長石・ 細砂粒	化粧土
11	E-7・8 2号住	ヘラミガキ	赤色	良好	石英・細砂粒, よく精選	丹塗り
12	E-7・8 2号住	ナデ	赤褐色	良好	石英・角閃石・長石・ 細砂粒	
13	E-7・8 2号住	ナデ	外淡褐色, 内黒色	良好	石英・細砂粒, よく精選	
14	E-7・8 2号住	ナデ	外黒色, 内淡褐色	良好	石英・細砂粒, よく精選	
15	E-7・8 2号住	外後ヘラミガキ ナデ	外黒色, 内淡褐色	良好	細砂粒, よく精選	
16	E-7・8 2号住	ナデ	外黒色, 内赤褐色	良好	石英・角閃石・細砂粒	穿孔あり(外→内)
17	E-8 2号住	ナデ	淡青灰色	良好	細砂土	須恵器
18	E-8 2号住	外タタキ, 内同心円タタキ	青灰色	良好	細砂土	須恵器
19	D・E-7 3号住	ナデ	外暗茶褐色, 内赤褐色	良好	石英・角閃石・長石・ 細砂粒	
20	D・E-7 3号住	不明	茶褐色	やや粗	石英・角閃石・長石・ 細砂粒	
21	D・E-7 3号住	ナデ	外黒色 内淡褐色	良好	石英・細砂粒, よく精選	
22	D・E-7 3号住	ナデ	赤褐色	良好	石英・長石・細砂粒	
23	D・E-7 3号住	不明	黄褐色	良好	石英・角閃石・長石・ 細砂粒	
24	D・E-7 3号住	外ヘラミガキ痕 不明	淡赤褐色	良好	石英・角閃石・長石・ 細砂粒	
25	D・E-7 3号住	ナデ	淡赤褐色	良好	石英・角閃石・長石・ 細砂粒	
26	D・E-7 3号住	不明	淡黄褐色	やや粗	石英・角閃石・長石・ 細砂粒	
27	D・E-7 3号住	ナデ	外黒色 内褐色	良好	石英・角閃石・長石・ 細砂粒	よく精選
28	D・E-7 3号住	ナデ	淡赤褐色	良好	石英・角閃石・長石・ 細砂粒	
29	D・E-7 3号住	外ナデ 内不明	青灰色	良好	石英・角閃石・長石・ 細砂粒	
30	D・E-7 3号住	回転ナデ調整	青灰色	良好	細砂土, 砂粒を含む	須恵器

第6表 土器 観察表 (2)

番号	出土地点	調整	色調	焼成	胎土	備考
31	D・E-7 3号住	外-タタキ 内-同心円タタキ	青灰色	良好	細砂土, 砂粒を含む	須恵器
32	D・E-6 4号住	外-ハケ目 内-ヘラミガキ	外-暗褐色, 内-淡茶褐色	良好	石英・長石・角閃石・ 細砂粒	
33	D・E-6 4号住	不明	外-淡赤褐色, 内-黒褐色	良好	石英・長石・角閃石・ 長石・細砂粒	
34	D・E-6 4号住	ナデ, 内-一部ヘラミガキ	外-暗褐色, 内-黄白色	良好	石英・長石・細砂粒	
35	D-4 1号土塚	ナデ	赤褐色	良好	石英・角閃石・長石・ 細砂粒	
36	D-4 1号土塚	外-ヘラミガキ 内-ナデ	暗茶褐色	良好	石英・角閃石・長石・ 細砂粒	
37	D-4 1号土塚	不明 (内)	外-黄褐色, 内-黒色	良好	石英・長石・角閃石・ 細砂粒	組織圧痕
38	D-4 1号土塚	ナデ	暗褐色	良好	石英・長石・細礫	
39	D-4 1号土塚	ヘラミガキ	外-赤色, 内-赤褐色	良好	石英・細礫	丹塗り, 高杯
40	D-4 1号土塚	内-ヘラミガキ	外-黄褐色, 内-黒色	良好	石英・長石・角閃石・ 細砂粒	組織圧痕
133	D-4	ヘラミガキ	外-赤色, 内-褐色	良好	石英・長石・角閃石・ 細砂粒	丹塗り, 貼り付け突帯
134	F-21	ヘラミガキ, ヨコナデ	赤褐色	やや粗	石英・長石・角閃石・ 細砂粒	貼り付け突帯, ヘラ刻目
135	F-21	外-ヘラミガキ 内-ハケ目	淡褐色	良好	石英・長石・角閃石・ 細砂粒	貼り付け突帯, ヘラ刻目
136	F-21	ヨコナデ	淡赤褐色	良好	石英・長石・角閃石・ 細砂粒	ヘラ刻目
137	F-21	ヘラミガキ	赤褐色	良好	石英・長石・角閃石・ 細砂粒	貼り付け突帯
138	F-20	ヘラミガキ	茶褐色	良好	石英・長石・角閃石・ 細砂粒	
139	F-18	ヨコナデ	茶褐色	良好	石英・長石・角閃石・ 細砂粒	貼り付け突帯, 沈線
140	F-21	ヨコナデ, ハケ目	暗褐色	良好	石英・長石・角閃石・ 細砂粒	貼り付け突帯
141	D-5	ヘラミガキ	淡黄褐色	良好	石英・長石・角閃石・ 細砂粒	器壁剥落, 丹塗り痕
142	F-5	外-ヘラミガキ ハケ目	暗褐色	良好	石英・長石・角閃石・ 細砂粒	
143	F-22	ナデ	黄褐色	良好	石英・長石・角閃石・ 細礫	
144	F-21	ナデ	黄褐色	良好	石英・長石・角閃石・ 細礫	半載竹管
145	E-5	ナデ, 内-不明	黄褐色	良好	石英・長石・角閃石・ 細礫	ヘラ刻目
146	F-14・15	ナデ	黄白色	良好	石英・長石・細砂粒	粘土帯つき目
147	E-6	ナデ	淡黄褐色	良好	石英・長石・角閃石・ 細礫	
148	D-7	不明	黄褐色	良好	石英・長石・角閃石・ 細礫	
149	E-6	ナデ	淡褐色	良好	石英・長石・角閃石・ 細礫	竹管, 刺突
150	D-6	不明	黄褐色	良好	石英・長石・角閃石・ 細礫	

第7表 土器観察表(3)

番号	出土地点	調整	色調	焼成	胎土	備考
151	E-5	ナデ	暗赤褐色	良好	石英・長石・角閃石・細礫	
152	E-6	不明	黄褐色	良好	石英・長石・角閃石・細礫	
153	E-6	ナデ	明黄褐色	良好	石英・長石・細砂粒	
154	E-6	ナデ	黒褐色	良好	石英・長石・細砂粒	
155	E-6・D-6	ナデ	外-黒褐色, 内-黄褐色	良好	石英・長石・角閃石・細礫	角閃石多し, 指頭圧痕
156	E-5	ナデ	外-黒褐色, 内-赤褐色	良好	石英・長石・細砂粒	
157	D-6	ナデ	外-黒色, 内-暗赤褐色	良好	石英・長石・細砂粒	刻目~繊維圧痕
158	D-4	ナデ	黄褐色	良好	石英・長石・角閃石・細礫	角閃石多し
159	E-4	ハケ目	外-黒褐色, 内-褐色	良好	石英・長石・角閃石・金雲母・細礫	指頭圧痕
160	E-5	ナデ	外-褐色, 内-黄褐色	良好	石英・長石・細砂粒	
161	E-4	ナデ, 内-一部ヘラミガキ	外-黒褐色, 内-黄褐色	良好	石英・長石・角閃石・金雲母・細砂粒	
162	D-6	ナデ	黒褐色	良好	石英・長石・細砂粒	
163	F-22	ナデ	外-赤褐色, 内-暗赤褐色	良好	石英・長石・角閃石・細礫	
164	E-6	ナデ, 内-一部ヘラミガキ	外-黒褐色, 内-赤褐色	良好	石英・長石・細砂粒	
165	E-4	ナデ	外-黒褐色, 内-赤褐色	良好	石英・長石・角閃石 細砂粒	
166	E-4	ナデ	淡褐色	良好	石英・長石・角閃石・金雲母・細礫	刻目~繊維圧痕
167	E-4	ナデ	外-赤褐色, 内-淡褐色	良好	石英・長石・角閃石・細砂粒	
168	E-4	ナデ	淡赤褐色	良好	石英・長石・角閃石・細砂粒	指頭刻目(?)
169	E-5	ナデ, 内-一部ヘラミガキ	外-黒褐色, 内-褐色	良好	石英・長石・角閃石 細砂粒	
170	E-5	ナデ	外-暗黄褐色 内-黄褐色	良好	石英・長石・細砂粒	
171	D-3	ヘラミガキ	外-赤色 内-褐色	良好	石英・長石・角閃石 細砂粒	
172	E-5	不明	淡褐色	良好	石英・長石・角閃石 細礫	丹塗り
173	E-5	ナデ	赤褐色	良好	石英・長石・角閃石 細礫	
174	E-4	不明	赤褐色	良好	石英・長石・角閃石 細礫	
175	E-5	ヘラミガキ	赤色	良好	石英・長石・角閃石 細砂粒	丹塗り
176	F-21	ケズリ, 内-ハケ目	淡褐色	良好	石英・長石・角閃石 細礫	
177	F-21	ケズリ	淡黄褐色	良好	石英・長石・角閃石・小礫	
178	E-4	ハケ目	淡黄褐色	良好	石英・長石・角閃石・細砂粒	

第8表 土器観察(4)

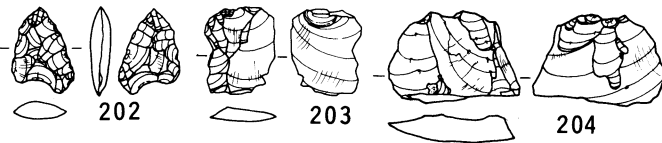
番号	出土地点	調整	色調	焼成	胎土	備考
179	F-14	ナデ	黄白色赤褐色	良好	石英・長石・角閃石・細砂粒	
180	F-21	ナデ	赤褐色	良好	石英・長石・角閃石・細砂粒	指頭圧痕
181	F-5	回転ナデ	青灰色	良好		
182	E-7・8	回転ナデ	淡灰褐色	良好	含細礫	
183	E-6	回転ナデ	青灰色	良好		
184	D-2	回転ナデ	暗青灰色	良好		灰釉
185	E-5	回転ナデ, 後ナデ	青灰色	良好		
186	E-7・8	外-平行タタキ 内-同心円タタキ	青灰色	良好		
187	E-4	外-平行タタキ 内-同心円タタキ	青灰色	良好		
188	D-7	外-平行タタキ 内-同心円タタキ	青灰色	良好		
189	E-7	外-平行タタキ 内-同心円タタキ	青灰色	良好		
190	E-5	外-平行タタキ 内-同心円タタキ	青灰色	良好		
191	F-9	外-格子タタキ 内-同心円タタキ	外-褐色 内-青灰色	良好		
192		外-格子タタキ 内-同心円タタキ	青灰色	良好		
193	D-6	外-格子タタキ 内-同心円タタキ	青灰色	良好		
194	E-5	回転ナデ	青灰色	良好		
195	F-14・15	外-平行タタキ 内-同心円タタキ	青灰色	良好		布目〜ヒモをまいたタタキ板
196	E-5	回転ナデ	灰色	良好		
197	E-7・8	ヨコナデ	灰褐色	良好	石英・長石・細砂粒	すり鉢
198	E-7・8			良		染付, 釉ダレ
199				良好		土錘, 両穿孔
200				良好		土錘
201						

2 石器

石器は、石鏃・打製石斧・敲石・磨石・石皿・剥片などが出土した。また、石材については黒曜石、頁岩、砂岩、安山岩がみられた。前回は、多くの石器を出土したが、今回は石斧・磨石は多くみられたが、その他の石器としては、石鏃が僅か1点出土したのみであった。

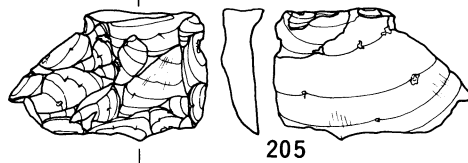
石鏃

202はF-21区Ⅶ層から出土した。気泡の少ない良質の黒曜石を石材とした打製石鏃である。先端部はやや鈍く、側面は外湾し最大幅が下方にある。基部は逆刺が円く抉りはやや深い。



剥片

203は気泡の少ない良質の黒曜石で縦長剥片である。204・205は側縁部に使用痕がみられる剥片で気泡の多い黒曜石を石材としている。



第33図 石鏃・剥片

石斧

前回は、磨製石斧34点、打製石斧70点が出土したが、今回は磨製石斧の出土はなかった。打製石斧は11点出土し、完形2、基部4、刃部1、基部・刃部欠損4点である。石材は砂岩が1点で他は全て頁岩である。

206は砂岩の母岩から剥出した横長剥片を石材にした完形品である。上方部に両面剥離による抉り入れを行い、その下方はやはり両面剥離による刃部を形成している。207は抉り入れが浅く刃部は舌状をなしている。やはり両面剥離によって調整を施している。完形品である。

208～210は刃部が欠損している基部である。208は基部先端が狭くなってくるもので両面剥離調整が施されている。209は両面剥離による抉り入れが行われているものである。210は泥岩質のもろい石材を利用している。両面調整剥離であり、基部頂端部には自然礫の面が残されている。211は基部・刃部とも欠損しており、212は基部を欠損した刃部である。ただ、刃部の調整にしては雑な剥離であることから、基部の可能性もある。

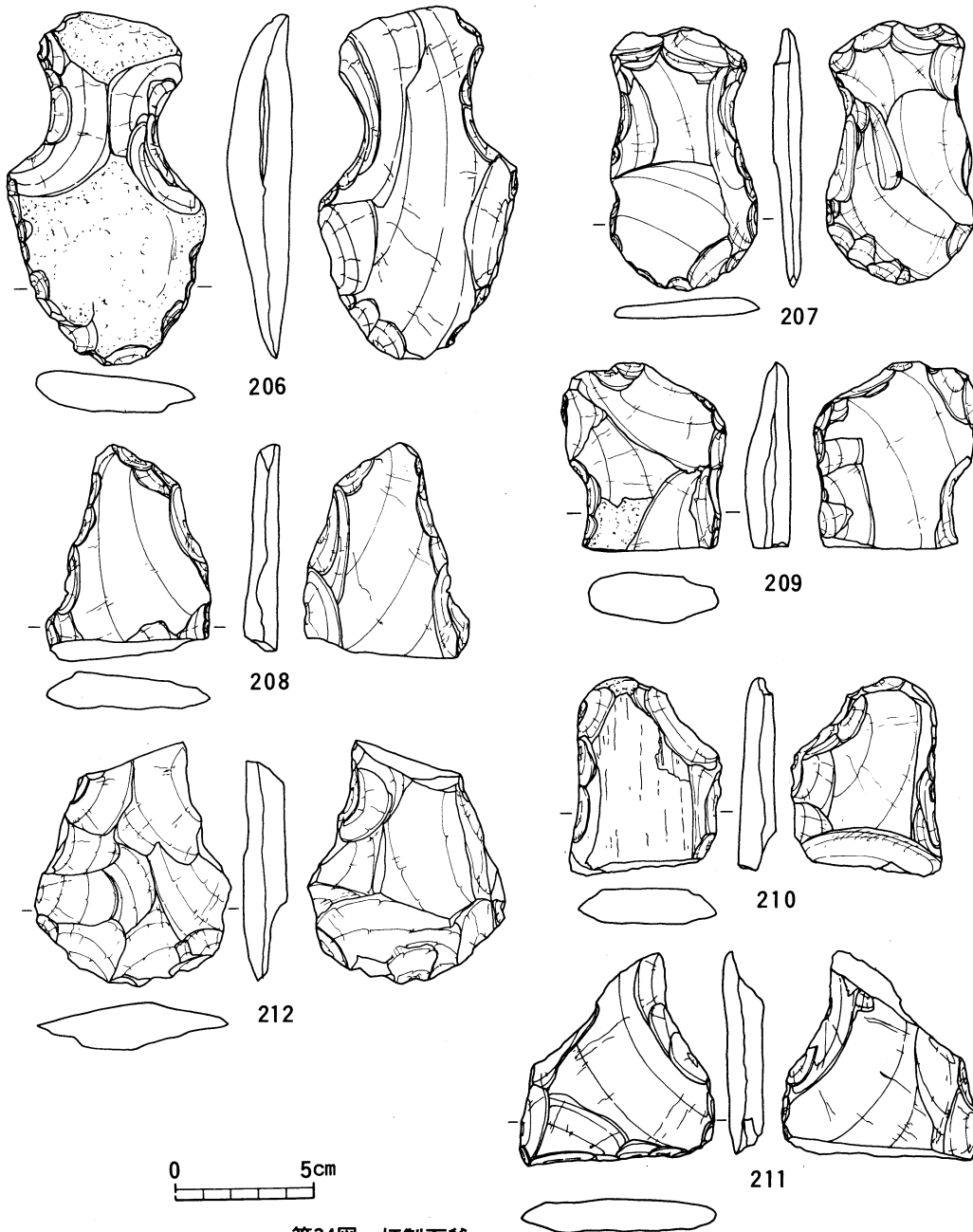
敲石・磨石

敲石・磨石は、棒状のものと円盤状のもの二つの形状があり、棒状のもの4点と円盤状のもの6点が出土している。敲き、押し潰し、磨るといった多機能をもつものが多い。

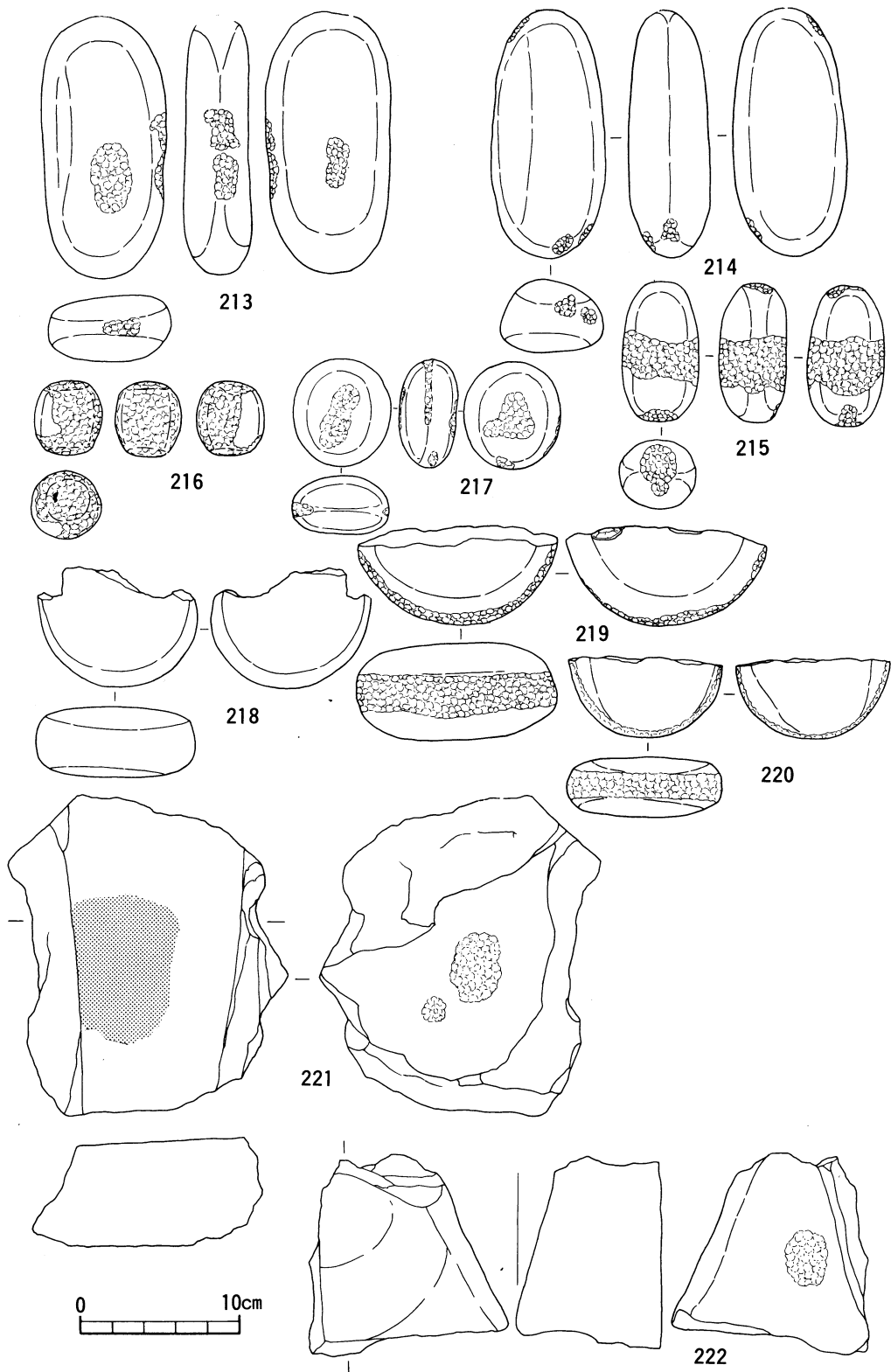
213は、やや扁平な長楕円形の安山岩を使用している。表裏面の両方のほぼ中央に連続した敲打による潰れ痕があり若干の凹みを形成している。また側縁部にも凹みが2ヶ所みられる。214は下端側縁部に敲打痕がみられる。215はやや小型の礫を用いているもので、円礫の側縁部の全周にわたって敲打痕がみられる。また上下端にも敲打痕がみられる。216は球状に近い砂岩の礫

を利用したもので、上下端及び側辺部に敲打痕がみられる。

217～220は円礫を用いた磨石である。217は円礫の表裏面の両方に敲打痕をもっているもので、連続した敲打による潰れ傷や引き掻き痕であり、はっきりした凹みをもたない。218は研磨のみで敲打痕はみられない。219・220は円礫の側縁部に激しい敲打による面的な使用部を全周にわたって形成しているもので、表裏面には敲打痕はみられない。



第34図 打製石斧



第35図 敲石・磨石・石皿

石皿

石皿は欠損品であるが3点出土している。221は割り石を利用したもので、凹みがあまりみられないが、中央部に研磨痕が認められる。裏面は自然面であるが、敲打による潰れ痕や凹みがみられ、台石としての用途が考えられる。222は楕円形に近い形態が想像され、凹みが顕著であり裏面には敲打による凹みが認められる。

第9表 石器計測表

No	器種	石材	区	層	最大長 cm	最大幅 cm	厚さ cm	重量 g	備考
1	石 鏃	黒曜石	F-21	Ⅶ	1.7	1.2	0.4	0.5	
2	剥 片	黒曜石	D-5	Ⅶ	1.7	1.3	0.25	0.5	縦長剥片
3	剥 片	黒曜石	F-21		(1.8)	2.4	0.5	2.05	縦長剥片
4	剥 片	黒曜石	F-21		2.5	3.8	0.8	7.05	横長剥片
5	打製石斧	砂 岩	D-5		12.6	7.0	2.4	193.2	完形
6	打製石斧	頁 岩	F-14		9.5	5.3	1.1	65.3	完形
7	打製石斧	頁 岩	D-5		(7.6)	5.8	1.2	69.3	基部
8	打製石斧	頁 岩	E-7	溝	(6.7)	5.7	1.6	83.5	基部
9	打製石斧	頁 岩	F-21		(7.0)	5.1	1.3	70.5	基部
10	打製石斧	頁 岩	F-18		(7.3)	7.0	1.4	81.2	基部・刃部欠損
11	打製石斧	頁 岩	B-15		(8.4)	7.1	1.5	101.0	刃部
12	敲 石	安山岩	E-4		16.3	7.6	4.2	796	細長
13	敲 石	安山岩	F-20	溝	15.4	7.0	4.5	775	細長
14	敲 石	安山岩	F-21		8.7	4.7	4.4	264	細長
15	敲 石	安山岩	F-22		4.7	4.3	4.2	116	磨痕有
16	磨 石	砂 岩	D-4		6.7	6.1	3.6	205	敲打痕有
17	磨 石	花崗岩	F-18		(7.4)	10.0	4.4	441	
18	磨 石	安山岩	B-15		(6.1)	12.3	6.0	649	敲打痕有
19	磨 石	安山岩	F-14		(5.0)	9.5	3.8	255	敲打痕有
20	石 皿	安山岩	B-15		(19.7)	(15.4)	6.6	2900	裏面に敲打痕有
21	石 皿	安山岩	F-20		(11.3)	(11.4)	9.0	1750	裏面に敲打痕有

第V章 ま と め

榎木原遺跡は昭和60年調査され、縄文時代早期から中・近世までの複合遺跡として知られていた。^(註1)今回は前回の北西側の地方道幅幅工事に伴う発掘調査で、5m×110mという細長い地域であったが、住居跡4基・土坑1基・溝状遺構・古道跡が検出され、縄文時代から近世までの遺物が出土した。以下各時代ごとに若干のまとめとしたい。

縄文時代

・遺構は住居跡が1基検出された。床面直上まで削平されていて、柱穴・壁面は不明確であったが床面は230×140cmの範囲である。出土遺物には浅鉢と小型壺の完形品がある。浅鉢は平底で肩部に一条の刻目突帯が施されていて、晩期の土器と思われるが類例が少なく資料の増加を待ちたい。小型壺も整形がやや雑であるが黒色研磨土器で類例の少ないものである。

・曾畑式・轟式土器等、前期から後期にかけての土器も出土したが、大半は晩期の土器であった。晩期の遺物は、VI層から出土しているが、同層からは弥生時代・古墳時代の遺物も出土していて、層位による編年はできなかった。

県内の晩期遺跡は最近多く発見され、また発掘調査例も多くなり、鹿児島県考古学会で発行した『鹿児島県下の縄文時代晩期遺跡』^(註2)では359ヶ所の遺跡が紹介されている。県内の晩期土器の編年は、河口貞徳氏によって上加世田式→入佐式→黒川式→井出下式土器という流れが組み立てられている。^(註3)

晩期の土器は、深鉢・精製浅鉢・粗製浅鉢・椀形(マリ形)土器に分類された。深鉢は口縁部が外反し、頸部と胴部で「く」の字状に折れる器形で、口縁部には沈線を横位に施した入佐式土器の特徴を示すものと、口縁部はやはり外反するが口縁部から頸部までが短く、頸部から肩部までが長い器形をもつもので、ヘラナデ調整を施している黒川式土器である。深鉢にはその他、晩期終末に位置付けられる刻目突帯文土器も出土している。浅鉢には粗製と精製がみられる。やはり、入佐式と黒川式土器に分けられる。その他、浅鉢の中にはいわゆる組織痕土器と呼ばれるものがある。この土器が確認されている遺跡は県内では32ヶ所が知られている。

榎木原遺跡では、このように入佐式土器がセット関係で出土した。また、前回は住居跡が検出され、その中にこのセット関係が示された。このような類例は、県内では末吉町入佐遺跡・^(註4)加世田市上加世田遺跡・^(註5)鹿屋市中ノ原遺跡の住居跡で確認されている。

石器は、石鏃・打製石斧・敲石・磨石・石皿等が出土した。この中で特徴的なのは、打製石斧である。前回は、磨製石斧も多く出土したが、今回は1点もなく打製石斧のみであった。今回11点、前回70点と面積の割に多く、また、いずれも扁平打製石斧と呼ばれるもので、有肩(分胴形)、撥形などがあり、縄文晩期に多く出土し、特に大隅地方には多いように思える。刃部に粗い擦痕を残すものもことから土掘り具と考えられ、縄文農耕を考えるに興味深いものである。

弥生時代の遺物

前回の調査時において、亀ノ甲タイプの甕形土器と、内外面にヘラケズリ調整を施して口縁部の内側に断面三角形の貼り付け突帯をめぐらした壺形土器が出土し、弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられている。今回も同時期の資料が出土している。板付Ⅱ式にみなされる壺（133）、亀ノ甲式の甕（140）である。また、高坏の坏部のさかいに三角突帯をもつ器形は、縄文時代晩期から弥生時代中期前半まで存在するが、142の坏部は浅くひろがるものと思われ、板付式・城ノ越式に伴う高坏であると考えられる。^(註6) 134の壺の縦位突帯は、類例が少なく珍しい。突帯間をむすぶものとして、下城式を思い浮かべるが、下城式では甕に施されている。^(註7) 西瀬戸内の阿方式のなかで、愛媛県北条市南宮ノ戸貝塚出土の壺に、わずかに例を見る。近畿地方のⅠ様式（新）の突帯紋の段階にも出現している。口縁部の内側に断面三角形の貼り付け突帯を持つものは、吹上町入来遺跡、^(註10) 鹿屋市水の谷遺跡、^(註11) 宮崎県高鍋町持田中尾遺跡、^(註12) 宮崎県新富町鏡遺跡、^(註13) 宮崎県宮崎市保木下遺跡等^(註14)にみられる。頸部や胴部に、断面三角形の貼り付け突帯をめぐらし、小さく刻目を施す例も、上記の遺跡と共通しているが、加えて宮崎県北諸県郡高崎町今村遺跡でも、瀬戸内系櫛描文とともに出土している。^(註15) 前期後半以降の近畿・瀬戸内文化の東九州への流入と、しだいに西瀬戸内地方が地域性を確立していく中での、とくに阿方式土器との交渉は、かつてから指摘されているが、^(註16) こうした刻目突帯をもつ壺は、前期末から中期初頭の壺において、近畿・瀬戸内で散見されるものである。134の壺は、貼付突帯文の種々の要素をもっており、特に西瀬戸内の影響をうかがわせる。^(註17)

133～142は、一括遺物ではないが、層位的、型的にセット関係でとらえられる可能性がある。前期末あるいは中期初頭の様式として成立するかどうか、^(註18) 今後資料が増加を待ちたい。鹿児島県の弥生土器の編年で、いまひとつ明確でなかった時期の様式として期待できるものと考えられる。土器については薩摩地方と大隅地方の地域性と留意しながら、より汎西日本的な弥生土器の編年観にも目を配る必要がある。編年のみにとどまらず、弥生文化の交流を考えるうえで貴重な資料であろう

古墳時代～平安時代

遺 構

住居跡（2号、3号）と土坑（1号）がこの時期の遺構で、4号住居跡もこの時期の可能性がつよい。南側路線外に古墳時代の集落が存在していることが考えられる。

遺 物

成川式土器が出土しているが、後世の攪乱で小破片が多く、接合・復元が困難で、図化できなかったものが多かった。前回の調査出土の成川式土器と、同様の土器である。成川式としては、^(註19) 新しい時期にあたる。

中・近世

遺 構

溝状遺構（1・2・3）と古道跡が検出された。溝状遺構内出土の鉄さいの他に、周辺からも鉄さいが採集され、製鉄に関係する遺構であると考えられる。

遺物

青磁、染付が出土した。

引用文献

- 註1 鹿児島県教育委員会「榎木原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 1987
- 2 鹿児島県考古学会「鹿児島県下の縄文時代晩期遺跡」鹿児島県考古学会秋季大会資料集 1988
- 3 河口貞徳「上加世田遺跡発掘調査概要―第5次―」加世田市教育委員会 1972
- 4 青崎和憲・繁昌正幸「上加世田遺跡―1―」加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 1985
- 5 鹿児島県教育委員会「昭和61年～63年発掘調査 現在報告書作成中」
- 6 小林行雄、杉原荘介「弥生土器集成 本編」1964
- 小田富士雄「入門講座・弥生土器 九州1・2・3」『考古学ジャーナル 76～79』1972
- 7 賀川光夫「東九州に於ける押型紋土器と弥生式土器」『考古学雑誌37-1』1951
- 真野和夫・牧尾義則「下城式土器文化の研究1」『大分県宇佐風土記の丘歴史民族資料館 研究紀要 V O 1 .1』1984
- 8 杉原荘介「伊薩阿方遺跡・片山遺跡概報」考古学集刊第2冊 1949
- 9 岡本健児「入門講座・弥生土器 四国3」『考古学ジャーナル 90』1974
- 10 河口貞徳「入来遺跡」『鹿児島考古 第11号』鹿児島県考古学会 1976.12
- 11 山口俊博、長野真一他「水の谷遺跡」『鹿屋市埋蔵文化財調査報告書(5)』鹿屋教育委員会 1986.3
- 12 北郷泰道「持田中尾遺跡」高鍋町教育委員会 1982.4
- 13 面高哲郎他「鏡遺跡・藤掛遺跡」新富町教育委員会 1983.3
- 14 面高哲郎他「保木下遺跡」宮崎県教育委員会 1986.3
- 15 石川恒太郎「今村遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書(3)』宮崎県教育委員会 1979.3
- 16 森貞次郎「弥生文化の発展と地域性―九州」『日本の考古学Ⅲ』1966
- 17 「突帯紋」『弥生文化の研究3 弥生土器1』1986
- 18 石川悦雄「宮崎平野における弥生土器編年―素描(MKⅡ)」『宮崎考古 第9号』1984.2
- 19 池畑耕一「成川式土器の細分編年試案」『鹿児島考古第14』鹿児島県考古学会 1980
- 多々良友博「成川式土器の検討」『鹿児島考古 第15号』1981



榎木原遺跡遠景 (東から)



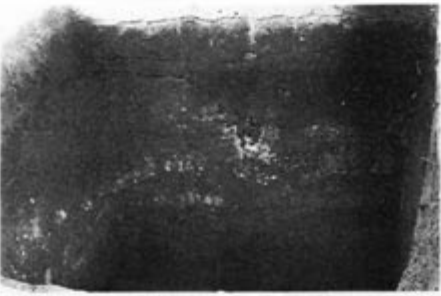
伐採作業風景 (西から)



草刈り作業風景 (西から)



発掘作業風景 (東から)



土層(1)



土層(2)



3号住居跡発掘風景



2・3号住居跡



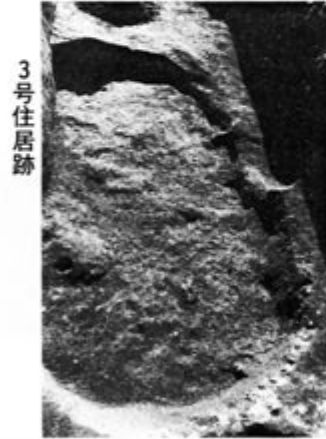
1号住居跡内 No.1 出土状況



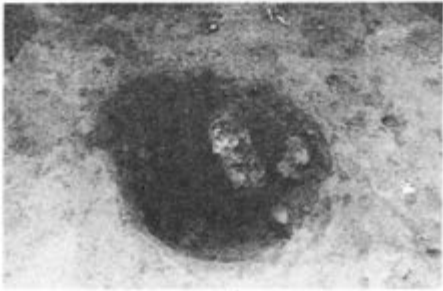
No.3 .No.9 遺物出土状況



溝状遺構



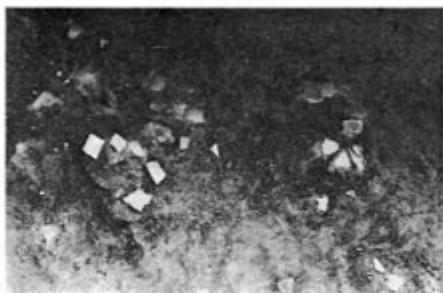
3号住居跡



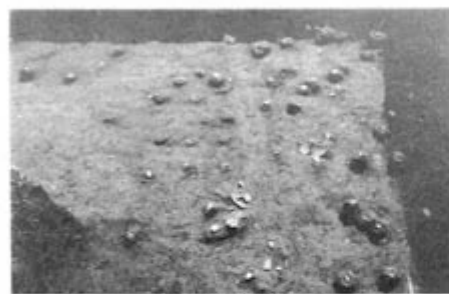
鉄滓の出土したビット



縄文土器出土状況 (No.47)



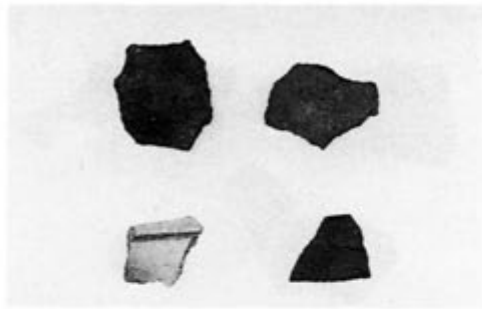
弥生土器出土状況



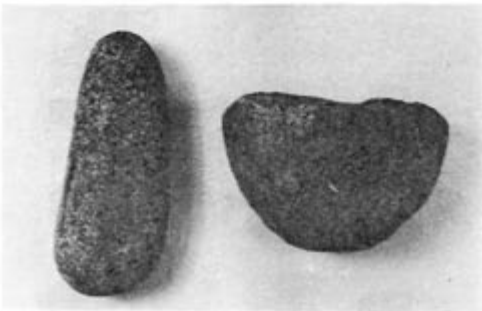
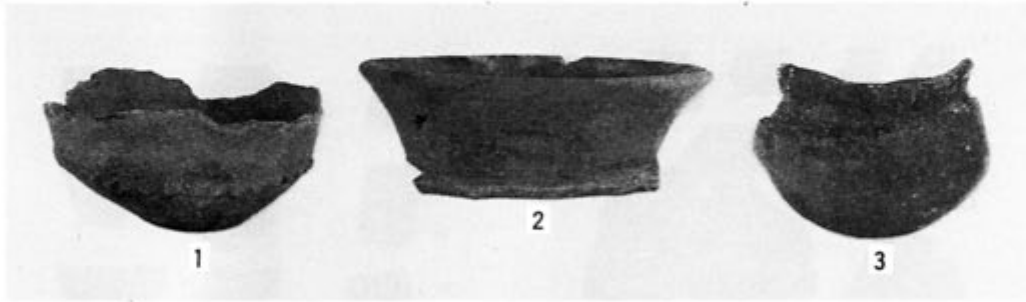
遺物出土状況



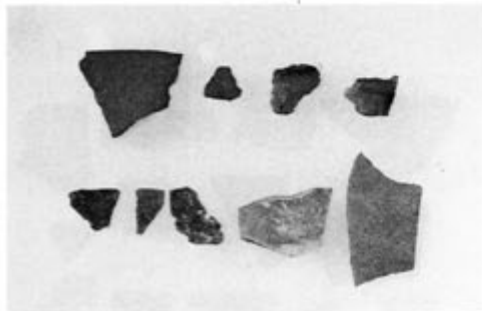
1号住居跡出土土器 (1~3)



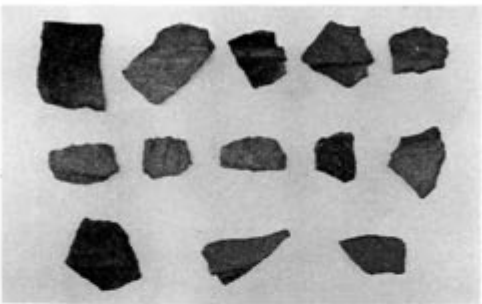
1号住居跡出土土器 (4~7)



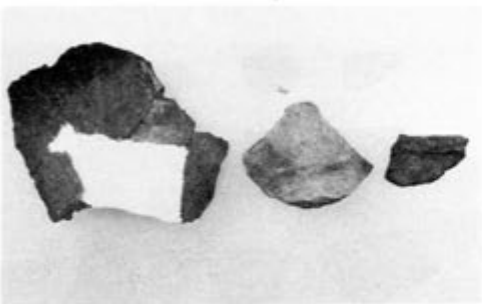
1号住居跡出土石器 (8·9)



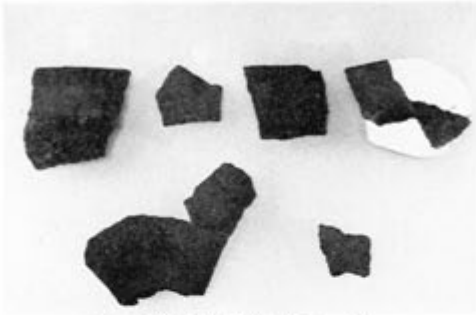
2号住居跡出土土器 (10~18)



3号住居跡出土土器 (19~31)



4号住居跡出土土器 (32~34)



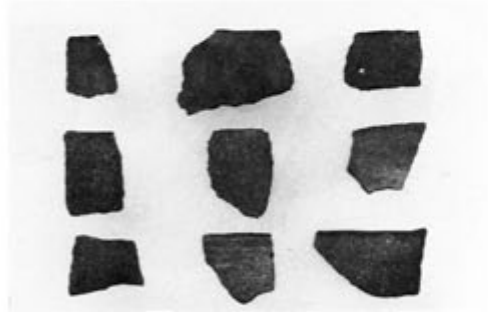
1号土坑出土土器 (35~40)



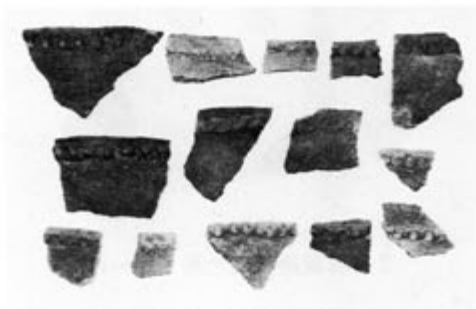
縄文土器 (41~47)



縄文土器 (48~54)



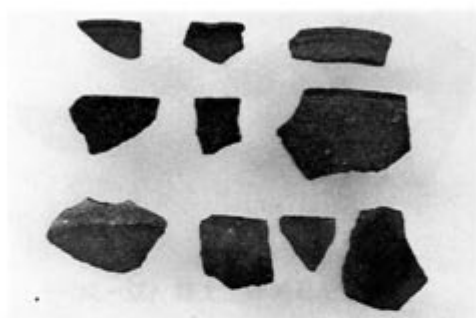
縄文土器 (55~63)



縄文土器 (64~77)



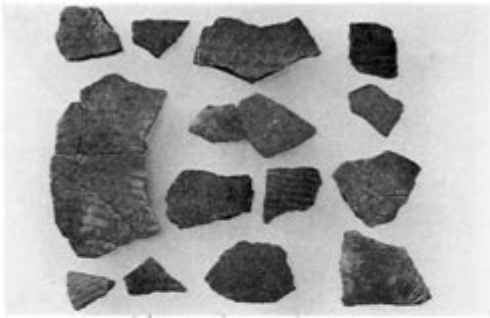
縄文土器 (78~89)



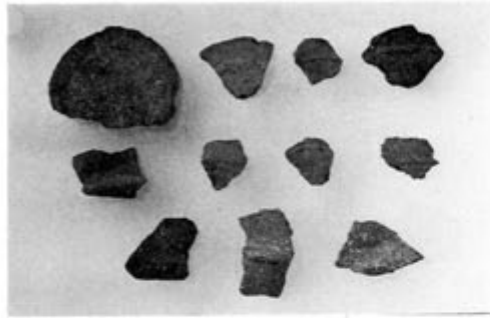
縄文土器 (90~99)



縄文土器 (100~107)



縄文土器 (108~121)



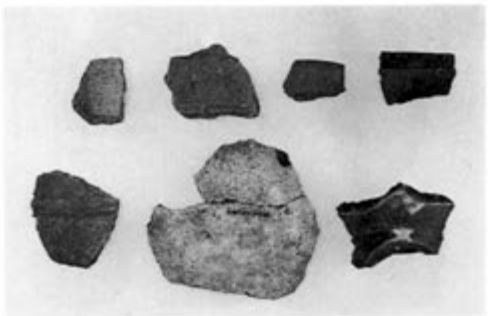
縄文土器 (122~132)



弥生土器 (133・134)



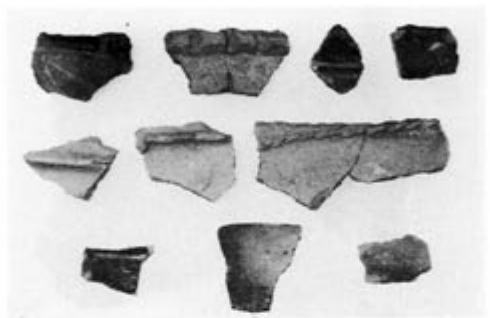
弥生土器 (135)



弥生土器 (136~142)



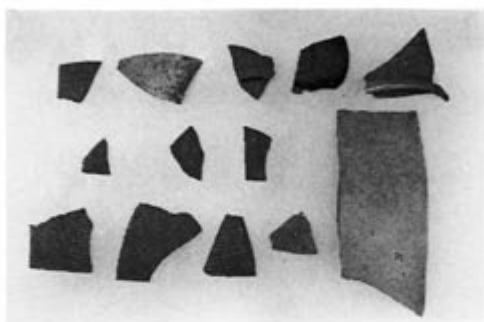
古墳時代の土器 (143~161)



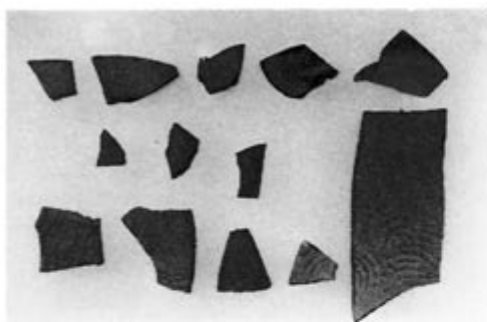
古墳時代の土器 (162~171)



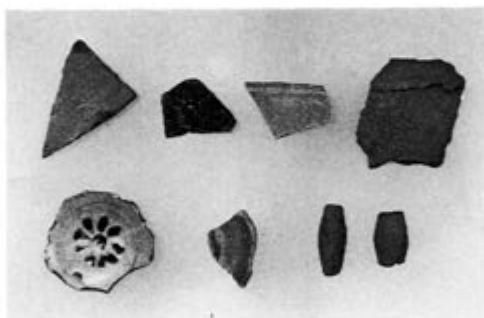
古墳時代の土器 (172~180)



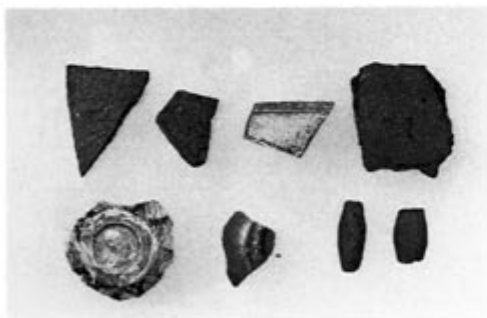
須恵器 (181~193)



同 裏



中・近世の遺物 (194~201)



同 裏



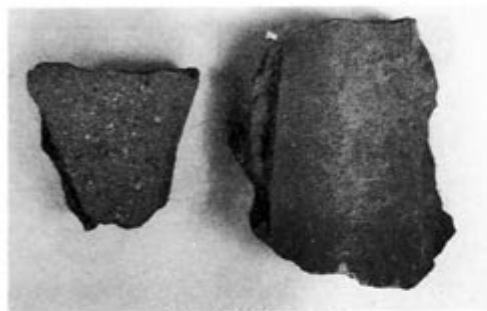
石鏃・剝片 (202~205)



打製石斧 (206~211)



敲石・磨石 (213~220)



石皿 (221・222)

あ　と　が　き

発掘調査は、残暑の厳しい9月半ばに始まり、周囲の木々も紅葉した朝晩涼しさが感じられる10月まで行われ、多くの成果を得た調査であった。

榎木原遺跡は、昭和60年にも発掘調査が行われており、縄文時代早期から中・近世までの複合遺跡であることが明らかになっている。この時調査に参加された方が今回も多く参加された。

調査はできるだけ詳細な記録をとることに心掛け、報告書の作成についても万全を期したつもりであるが、かならずしも十分とはいえないものになった。

調査にあたり便宜を図って下さった鹿屋市教育委員会・高須・浜田集落の皆様・川島組、そして作業員としてご協力いただいた地元の方々、整理作業に従事していただいた文化課埋蔵文化財収蔵庫の方々に心より感謝申し上げます。

発掘作業員

坂下 正、坂下 松吉、上宮シズエ、東 サエ子、中園 サヨ、上飯屋エミ
柿内トシエ、大坪イク子、木山 キミ、山下ミツエ、出口ミツエ、図師 ユカ
渡口エイチ、図師 タキ、豊崎 絹子

整理作業員

川畑 恵子、相良 政子、高瀬 孝子

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(51)

一般地方道永吉高須線改良事業に伴う埋蔵文化財報告書

榎木原遺跡Ⅱ

発行日 平成元年3月30日

発行 鹿児島県教育委員会 ☎892 鹿児島市山下町14番50号

印刷所 竹宝堂印刷 ☎890 鹿児島市平野町7-13